

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第330集

# 水ノ口遺跡発掘調査報告書

担い手育成基盤整備事業（真城地区）関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団

埋蔵文化財センター

み の くち

# 水ノ口遺跡発掘調査報告書

担い手育成基盤整備事業（真城地区）関連遺跡発掘調査

## 序

岩手県には、旧石器時代の遺跡を始めとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地域にあり、平成10年度の岩手県教育委員会のまとめでは9,900か所を超えております。先人が残したこれらの埋蔵文化財を保護し保存していくことは、私たち県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本調査の原因となりました担い手育成基盤整備事業真城地区を例に挙げるまでもなく、現代社会を豊かにし、快適な生活をおくるための地域開発もまた県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と地域開発事業という相容れない要素を持つ事業の調和がとれた施策が、今日的な課題となっております。

財団法人岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場から、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す処置をとって参りました。

本書は、岩手県による担い手育成基盤整備事業真城地区に関連した、水ノ口遺跡の発掘調査結果をまとめたものであります。遺跡は北上川の右岸で、かつ北上川水系に属する胆沢川によって形成された扇状地の扇端部に立地し、平安時代の集落跡を始めとして、縄文時代の陥し穴や近世の溝跡等、各種の遺構とそれらに伴う遺物が発見されています。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご協力とご援助を賜りました水沢地方振興局水沢農村整備事務所や前沢町教育委員会を始めとする多くの関係諸機関・関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成12年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 船越昭治

## 例　　言

1. 本報告書は、岩手県胆沢郡前沢町白山字水ノ口57他に所在する水ノ口遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。

2. 本遺跡の岩手県遺跡登録台帳の遺跡番号と調査略号は次の通りである。

　水ノ口遺跡　（遺跡番号：NE 37-2033・調査略号：MK98）

3. 本遺跡の調査は、担い手育成基盤整備事業真城地区に伴う緊急発掘調査である。調査は、岩手県教育委員会事務局文化課の調整を経て、水沢地方振興局水沢農村整備事務所からの委託を受けた、財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

4. 野外調査の期間と、調査面積・調査担当者は次の通りである。

　調査期間　平成10年4月16日～6月18日

　調査面積　2,700m<sup>2</sup>

　調査担当者　半澤武彦・菊池貴広・平澤里香

5. 本報告書の執筆は半澤武彦が、遺物観察は菊池貴広が担当し、編集は半澤武彦が行った。

6. 室内整理作業は、平成10年11月1日～平成11年3月31日まで実施した。

7. 出土品の鑑定及び分析は、次の機関・個人に依頼した。（敬称略）

　石材鑑定……………花崗岩研究会（会長：矢内桂三　岩手大学工学部教授）

　炭化物同定（肉眼鑑定）……早坂松次郎（社団法人　岩手県木炭協会）

　樹種同定……………木工舎「ゆい」

　鉱屑鑑定……………岩手県工業技術センター　金属材料部

8. 基準点の測量及び航空写真撮影は、次の機関に委託した。

　基準点の測量……………興国設計株式会社

　航空写真撮影……………東邦航空株式会社

9. 発掘調査・整理作業に於いて、次の機関の協力を得た。

　前沢町教育委員会・愛知県陶磁資料館・常滑市民俗資料館・瀬戸市埋蔵文化財センター

　佐賀県立九州陶磁文化館

10. 野外調査や整理・報告書の作成には、次の方々からのご協力とご指導を頂いた。（順不同・敬称略）

　小野寺義文　及川真紀　阿部　一（前沢町教育委員会）

　仲野泰裕　森　達也（愛知県陶磁資料館）

　中野晴久（常滑市民俗資料館）

　藤澤良祐　青木　修（財團法人　瀬戸市埋蔵文化財センター）

　吉永陽三（佐賀県立九州陶磁文化館）

11. 野外調査では前沢町水ノ口地区を始めとする地元の方々と、室内整理に於いては当センター臨時職員の方々によるご協力を頂いた。

12. 本遺跡の調査に関わる記録、遺物等の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

# <本文目次>

## 序

## 例　言

I. 調査に至る経過 .....	1
II. 遺跡の立地と環境 .....	1
1. 遺跡の立地と地形及び地質 .....	1
2. 遺跡の基本層序 .....	4
3. 周辺の遺跡 .....	5
III. 調査の方法と室内整理 .....	8
1. 野外調査 .....	8
2. 室内整理 .....	10
IV. 検出された遺構と出土遺物 .....	12
(1) 壁穴住居跡・住居状遺構 .....	13
(2) 溝　跡 .....	22
(3) 土　坑 .....	37
(4) 井戸跡 .....	42
(5) 柱穴・柱穴状土坑 .....	42
(6) 陥し穴 .....	45
(7) 鋳冶炉または製鉄跡と推定される炉跡遺構 .....	46
V. ま　と　め .....	49
1. 調査全般について .....	49
2. 出土遺物について .....	49
VI. 分析・鑑定結果 .....	60
水ノロ遺跡出土材樹種同定 .....	61
報告書抄録 .....	99

## <図版目次>

第1図 遺跡の位置及び遺跡周辺地形図	2	第23図 R G22 (平面図及び断面図)	36
第2図 周辺地域地形分類図	3	第24図 東端部(1)土坑・柱穴状土坑群 (平面図及び断面図)	38
第3図 基本層序図	4	第25図 東端部(2)土坑・柱穴状土坑群 (平面図及び断面図)	39
第4図 周辺の遺跡分布図	7	第26図 東端部(3)土坑・柱穴状土坑群 (平面図及び断面図)	40
第5図 グリッド配置図	9	第27図 南端部県道脇の遺構 (平面図及び断面図)	41
第6図 実測図凡例	11	第28図 R G16・井戸跡・土坑・柱穴 (平面図及び断面図)	43
第7図 R A 1 (平面図)	13	第29図 陥し穴1・2 (平面図及び断面図)	45
第8図 R A 1 (断面図)	14	第30図 炉跡・R G21 (平面図及び断面図) 〔※トレーシング印刷面〕	46
第9図 R A 1 (かまど部分断面図)	15	第31図 炉跡R D40 (平面図・ 断面図及び出土遺物実測図)	48
第10図 R A 3 (平面図及び断面図(1))	17	第32図 R A 1 出土遺物(1)	50
第11図 R A 3 (平面図及び断面図(2))	18	第33図 R A 1 出土遺物(2)	51
第12図 R A 2・R A 4 (平面図及び断面図)	19	第34図 R A 1・2 出土遺物	52
第13図 R A 5・R A 6 (平面図及び断面図)	20	第35図 R A 3 出土遺物(1)	53
第14図 R A 7 住居状遺構 (平面図及び断面図)	21	第36図 R A 3 出土遺物(2)	54
第15図 北端部溝跡 (平面図及び断面図)	25	第37図 R A 3・4・7 出土遺物	55
第16図 R G11・12・土坑・柱穴状土坑 (平面図及び断面図)	27	第38図 R D3～P P33 出土遺物	56
第17図 R G13 (平面図及び断面図)	28	第39図 R G16・17・20 出土遺物	57
第18図 北東部溝跡 (平面図及び断面図)	29	第40図 遺構外出土遺物	58
第19図 R G17・柱穴状土坑群 (平面図及び断面図)	31	第41図 遺構内出土遺物 (陶磁器・木製品)	59
第20図 R G18 (平面図及び断面図)	32		
第21図 R G19・R D32 (平面図及び断面図)	34		
第22図 R G20・柱穴状土坑群 (平面図及び断面図)	35		

## ＜写真図版目次＞

写真図版1 航空写真(1) .....	68	写真図版15 R D33～40 (平面及び断面) .....	82
写真図版2 航空写真(2) .....	69	写真図版16 柱穴1～4 (平面及び断面) .....	83
写真図版3 出土遺物 (陶磁器) 〔※カラー一頁〕 .....	70	写真図版17 土坑・柱穴状土坑群全景 .....	84
写真図版4 調査前風景・作業風景 ・基本層序 .....	71	写真図版18 溝跡全景・RG 1～4 (断面) .....	85
写真図版5 RA 1 (遺構) .....	72	写真図版19 RG 5～10 (断面) .....	86
写真図版6 RA 1 (出土遺物) RA 2 (平面及び断面) .....	73	写真図版20 RG 11～14 (断面) .....	87
写真図版7 RA 3 (遺構及び出土遺物) .....	74	写真図版21 RG 15～18 (平面及び断面) .....	88
写真図版8 RA 4～7 (平面及び断面) .....	75	写真図版22 RG 19～22 (断面及び平面) .....	89
写真図版9 RD 3～8 (平面及び断面) .....	76	写真図版23 井戸跡・陥し穴(1)・(2) .....	90
写真図版10 RD 10・27～13 (平面及び断面) .....	77	写真図版24 炉跡・遺構外出土遺物 .....	91
写真図版11 RD 14～18 (平面及び断面) .....	78	写真図版25 遺構内出土遺物1～16 .....	92
写真図版12 RD 19～22 (平面及び断面) .....	79	写真図版26 遺構内出土遺物17～38 .....	93
写真図版13 RD 23～26 (平面及び断面) .....	80	写真図版27 遺構内出土遺物39～52 .....	94
写真図版14 RD 27～32 (平面及び断面) .....	81	写真図版28 遺構内出土遺物53～70 .....	95
		写真図版29 遺構内・外出土遺物71～81 .....	96
		写真図版30 遺構内・外出土遺物82～91 .....	97
		写真図版31 遺構内・外出土遺物92～95 .....	98

## ＜表＞

第1表 土坑一覧 ..... 37

第2表 柱穴・柱穴状土坑一覧 ..... 44

## I 調査に至る経過

水ノロ遺跡は、「担い手育成基盤整備事業真城地区」の施行に伴って、その事業区域に位置することから発掘調査することとなったものである。

「担い手育成基盤整備事業真城地区」は、水沢市真城及び前沢町古城の一部にまたがる受益面積266haの地区で、昭和32年頃10a区画に整理されたが、区画形状が小さく農道の幅員も狭いなど、大型機械化体系の導入に支障を来している。

また、小水路は土水路で用排水兼用となっているため、浅く、排水不良地帯が大部分を占めており、耕地の汎用化が困難な状況にある。

これらの阻害要因を除去し、効率的かつ安定的な経営体に農地を集積し、高生産性農業の確立を図り、併せて農村環境水準の向上を資するために、大区画圃場整備を実施するものとして、平成7年度新規採択された地区であり、平成9年で3年目となる。

当事業の施行に係わる埋蔵文化財の取扱いについては、水沢地方振興局胆江土地改良事業所から平成7年6月5日付け胆土地第179号「県営圃場整備事業実施に伴う遺跡分布調査について（依頼）」の文書により、岩手県教育委員会に対して分布調査の依頼を行ったのが最初である。依頼を受けた岩手県教育委員会では、平成7年7月17日～18日に分布調査を実施したが、その結果は平成7年8月25日付け教文第478号「県営圃場整備事業実施に伴う埋蔵文化財の分布調査について（回答）」に於いて、水沢地方振興局胆江土地改良事業所へ回答し、その際、工事施工範囲が水ノロ遺跡の範囲内でもあることが付記された。

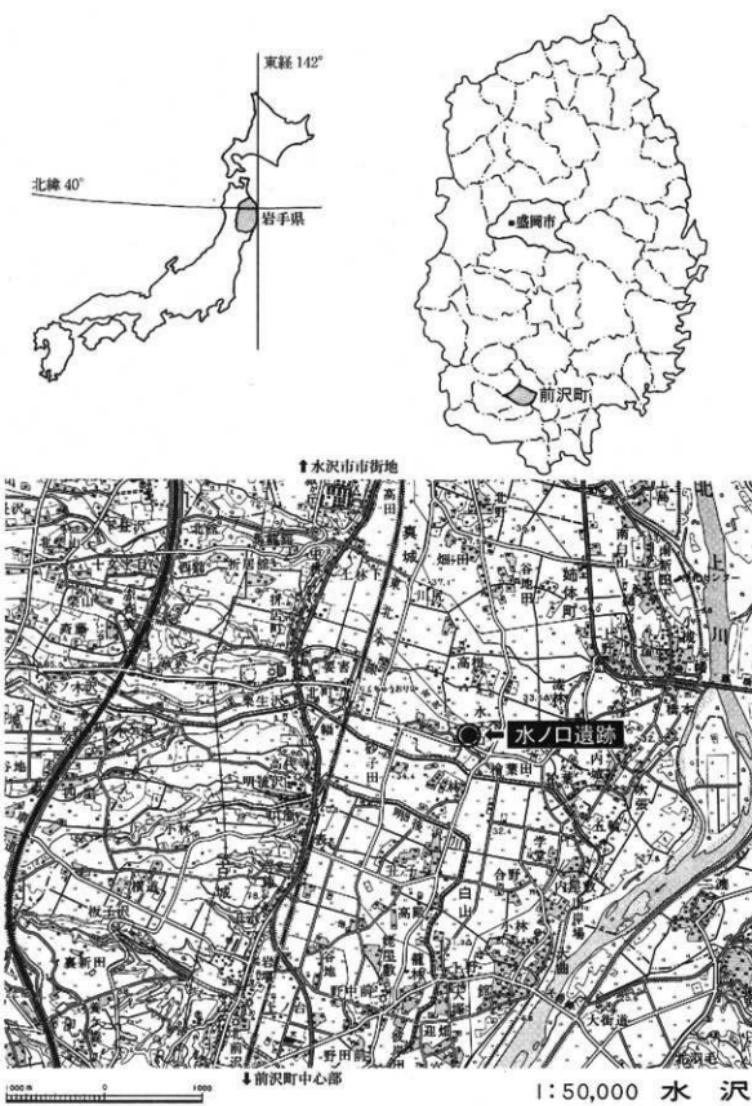
回答を受けた水沢地方振興局胆江土地改良事業所では、水ノロ遺跡を含む面工事実施年度である、平成9年11月27日付け胆土地第387号「担い手育成基盤整備事業真城地区に係わる埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」の文書により、岩手県教育委員会に対して試掘調査を依頼した。依頼を受けた岩手県教育委員会では、平成9年12月1日～10日に試掘調査を実施したが、その結果は平成10年1月14日付け教文第846号「担い手育成基盤整備事業真城地区に係わる埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」に於いて、水沢地方振興局胆江土地改良事業所へ回答し、その際に、水ノロ遺跡の発掘調査を必要とする旨が付記された。

## II 遺跡の立地と環境

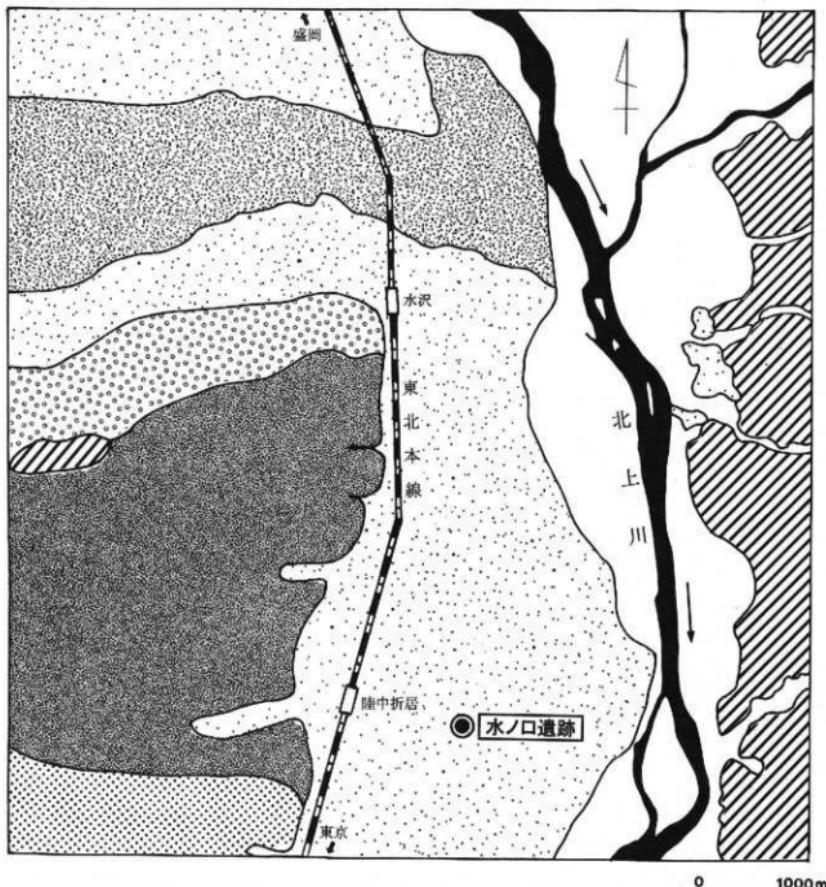
### 1. 遺跡の立地と地形及び地質

「水ノロ遺跡」の位置する胆沢郡前沢町は、東西に約13km、南北に約9km、総面積が72.34km<sup>2</sup>の菱形に似た形をしており、西側の奥羽山脈と東側の北上山地に挟まれ、北上川が形成した沖積地と、北上川の支流である胆沢川が長年に渡って形成した扇状地上にその大部分が立地している。行政区画上からみると、北は水沢市、東は東山町、南は平泉町、西は胆沢町と衣川村にそれぞれ接し、古くから北に接する水沢市とともに商業のまちとして発展するとともに、現在は水沢市のドミニトリータウンとしての役割や、半導体工場を始めとする産業の集積、大規模ショッピングセンターの開店など、県南の中核都市の一部を担う役割を果たしている。

本遺跡は、JR東北本線陸中折居駅の東約1.5kmに位置し、開析が進行した胆沢扇状地扇端東端部の、寿安中堰に潤される微高地上（図中：水沢段丘面M.2）にあり、水沢市との境界線が、調査区北側付近を通つ



第1図 遺跡の位置及び遺跡周辺地形図



第2図 周辺地域地形分類図

ている。古来から胆沢扇状地の湧水に恵まれたところであり、遺跡の東約2kmには北上川が南流し標高は約32.8m~35.6mを示している。

調査区には、中央部を東西方向へ横断するように原地形が残ったものと思われる幅約5mの小川が滞留しそれを境にして北側部分は休耕田転用の畑地、南側部分は盛土の畑地となっている。周辺部の現況は、水田が一帯に広がっているが、調査区も含めて昭和30年代の圃場整備により造成されているため、地形が改変されている部分が見られる。

## 2. 基本層序

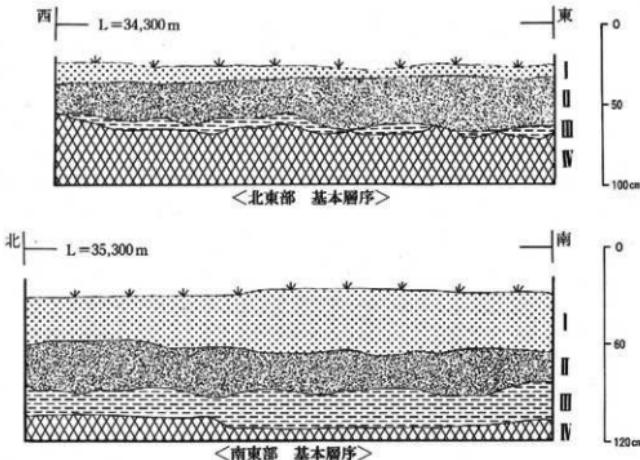
調査区のはば中央より北東側及び南東部で確認した基本層序は以下の通りである。

### <北東部：炉跡付近（南断面）>

- I層：10Y R3/4・暗褐色土・綿まり密・粘性中（現表土で、休耕田であった）
- II層：10Y R3/4・暗褐色土・綿まり密・粘性中（炭化物を土中に少量含んでいる）
- III層：10Y R2/3・黒褐色土・綿まり密・粘性あり
- IV層：10Y R5/8・黄褐色土・綿まり密・粘性強（地山層を構成し、粘土質を示している）

### <南東部：1号竪穴住居跡（RA1）付近（西断面）>

- I層：10Y R3/4・暗褐色土・綿まり密・粘性中（現表土で、大麦栽培の畑地であった）
- II層：10Y R3/4・暗褐色土・綿まり密・粘性中
- III層：10Y R2/2・黒褐色土・綿まり密・粘性中
- IV層：10Y R5/6・黄褐色土・綿まり密・粘性強（地山層を構成し、粘土質を示している）



第3図 基本層序図

### 3. 周辺の遺跡

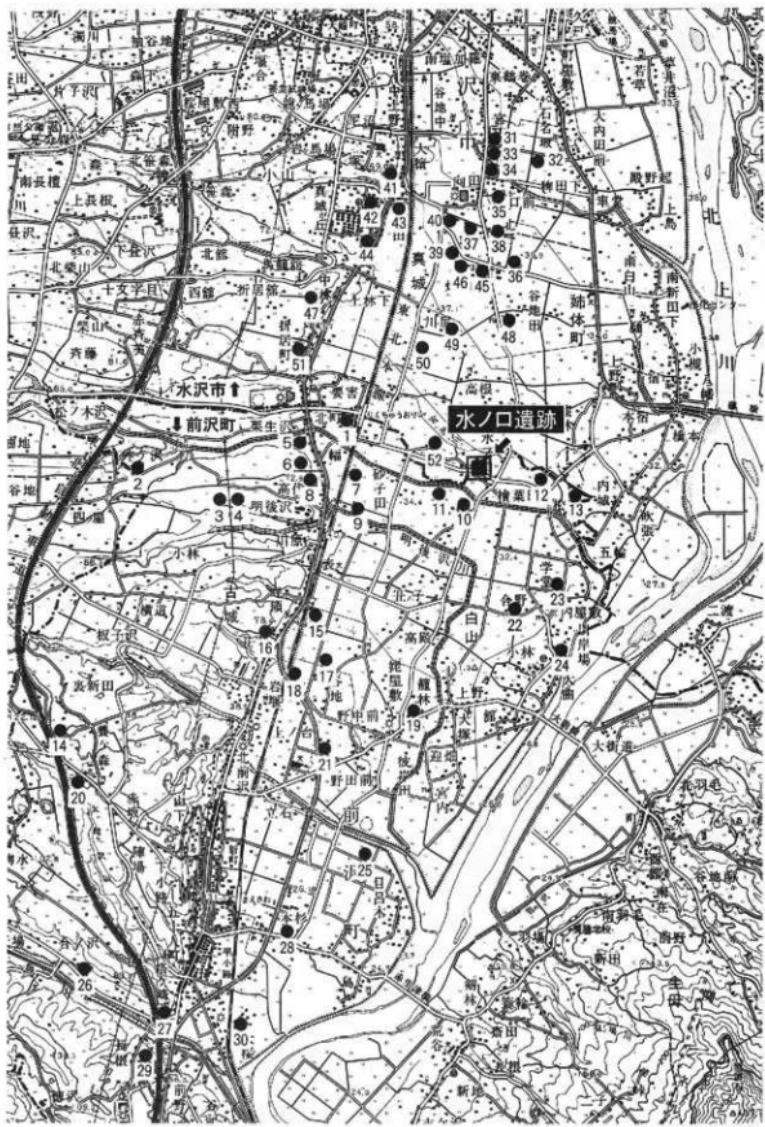
調査を行った当該遺跡を始め、胆沢扇状地の扇端部周辺には、ほぼ同時代のものと思われる遺跡が数多く分布していることが、次に挙げる周辺の遺跡一覧表から読み取ることができる。この表は平成10年4月発行の「岩手県教育委員会遺跡台帳」をもとに、当該遺跡周辺に分布する遺跡の詳細をまとめたものである。

周辺の遺跡一覧（前沢町）

No.	遺跡名	所 在 地	種 別	時 代	遺 物・遺 構 等
1	北 館	前沢町古城字北館	環壕屋敷跡・散布地	平 安・中 世	土師器
2	古 城 外 ケ 沢	# 古城字外ヶ沢	#	#	縄文土器(中期)・土師器
3	鳥 子 沢	# 古城字鳥子沢	#・城館跡	平 安・中 世	土師器・壙跡
4	明 後 沢	# 古城字明後沢	散布地	奈 良	布目瓦・屋根瓦・鬼瓦
5	熊 野	# 古城字幅	瓦窯跡?	平 安	瓦
6	幅	# 古城字幅・雨沼・志人沢	散布地・瓦窯跡?	縄 文・平 安	縄文土器・土師器・焼土
7	砂 子 田	# 古城字砂子田	#	平 安	土師器
8	八 郎 館	# 古城字高代寺	#・城館跡	平 安・中 世	土師器・須恵器・壙・郭
9	館 合 下	# 古城字館合下	散布地	平 安	土師器・須恵器
10	林 I	# 古城字林後	#	古 代	土師器・須恵器
11	林 II	# #	#	#	土師器
12	檜 葉 田	# 白山字檜葉田	#	平 安	土師器
13	松 葉	# 白山字松葉	#	#	土師器
14	養 ケ 森	# 字養ケ森	集落跡	#	土師器・須恵器
15	寺 領 沖	# 古城字寺領沖	#	古 代	土師器
16	古 城 上 野	# 古城字丑沢	#	古 代	縄文土器(中期)・土師器・石器
17	要 害	# 古城字要害	#	#	土師器
18	亀 田	# 古城字亀田	環壕屋敷跡	平 安	土師器・須恵器
19	田 高 II	# 白山字田高	散布地	縄 文・平 安	土師器・須恵器・石斧
20	上 ノ 原	# 字養ケ森	#	#	土師器・須恵器・石鎚・石匙
21	上 ノ 台	# 古城字上ノ台	環壕屋敷跡	古 代	土師器
22	合 野	# 白山字合野	集落跡	#	土師器・石斧
23	内 屋 敷	# 白山字内屋敷	散布地	平 安	土師器
24	川 岸 場 I	# 白山字川岸場	#	縄 文・古 代	注口土器・甕・高杯・皿・瓶子
25	竹 沢	# 字北久保	#	平 安	須恵器
26	合 ノ 沢 A	# 字合ノ沢	#	縄 文・平 安	縄文土器(中期)
27	泊 ケ 嶠	# 字泊ヶ崎	#	#	縄文(牛堀・天王山)土師・須恵器
28	目 凸 木 本 杉	# 字木本杉	#	古 代	土師器・甕
29	新 城	# 字新城	集落・城館跡	縄 文・平 安	縄文土器・土師器・須恵器
30	大 桜	# 字大桜	散布地	平 安	土師器・須恵器

周辺の遺跡一覧（前沢町以外の周辺地域－水沢市）

No.	遺跡名	所 在 地	種 別	時 代	遺 物・遺構 等
31	林 前 I	水沢市姉体町林前	集落跡	平 安	土師器・須恵器
32	林 前 II	" 真城林前	散布地	"	土師器・須恵器
33	林 前 南 館	" 姉体町林前	館 跡	"	土師器(複合遺跡・縄文)
34	向 田	" 姉体町向田	散布地	"	土師器
35	北 野 I	" 真城北野	"	"	土師器・須恵器
36	北 野 II	" 真城北野	集落跡	"	土師器・須恵器
37	北 野 III	" 真城北野	"	"	土師器・須恵器
38	金 田 I	" 真城金田	"	"	土師器・須恵器
39	金 田 II	" 真城金田	散布地	"	須恵器
40	東 谷 地	" 真城東谷野	"	"	土師器
41	大 壇	" 真城大壇	集落跡	"	土師器・須恵器
42	雷 神 I	" 真城雷神	"	"	土師器・須恵器
43	高 田	" 真城高田	"	"	土師器・須恵器
44	真城上野団地	" 真城雷神	"	"	土師器・須恵器
45	烟 田 I	" 真城烟田	散布地	"	土師器・須恵器
46	烟 田 II	" 真城烟田	"	"	土師器・須恵器
47	中 林 B	" 真城中林	集落跡	"	土師器・須恵器
48	寺 ケ 前	" 真城谷地田	散布地	"	土師器
49	土 手 北	" 真城土手	"	"	土師器・須恵器
50	二 ノ 潤	" 真城二ノ潤	"	"	土師器・須恵器(複合遺跡・中世)
51	堤 ケ 沢	" 真城堤ヶ沢	集落跡	"	土師器・須恵器
52	栗 林	" 真城字八反町	"	"	土師器・須恵器(複合遺跡・近世)



第4図 周辺の遺跡分布図

### III 調査の方法と室内整理

#### 1. 野外調査

##### (1) グリッドの設定

野外調査に於けるグリッドの設定にあたり、平面直角座標第X系を座標変換した調査座標を用いた。水ノ口地区の調査座標原点は、X = -101,200.000, Y = +28,195.000である。この座標原点を基点として、遺跡全体を一辺50mの大グリッドに区画した。北西隅を基点に、東方向へはアルファベットの大文字でA～D、南方向へはI～VIの数字を付して、これを組み合わせ1 A, 2 B・・と表示した。

小グリッドは、大グリッドを10等分して 5m × 5m に区画し、北西隅を基点に東方向へはa～j、南方向へは1～10を付して、1 a, 2 b・・と設定した。

##### (2) 粗掘りと遺構検出

本調査に先立ち、岩手県教育委員会文化課による試掘調査が実施されており、今回の調査対象区域の大部分について、遺構と遺物の状況がある程度把握されていた。調査にあたり、試掘トレンチ付近に 2m × 2m 程度のトレンチ箇所を設定し、層の状況把握に努めた。この結果、調査区全域の層序が比較的単純で、しかも水平であることや、耕作土（I層）中には比較的遺物が少であることなどから、粗掘りには重機（パワーショベル）を使用し、その後人力による遺構検出を順次実施した。

##### (3) 遺構の命名について

検出された遺構の命名については、下記の記号を用いて付記することとした。各種遺構の遺構番号については検出順に付しており、欠番になっているものについては、整理作業の過程で遺構としての認定から除外したものである。

竪穴住居跡・住居状遺構 RA	土坑 RD	構跡 RG	柱穴状土坑 PP	焼土遺構 RF
----------------	-------	-------	----------	---------

検出されたその他の遺構については、上記の命名方法をとらず、遺構そのものの名称を付すこととした。

##### (4) 遺構の精査と実測・遺物の採り上げ

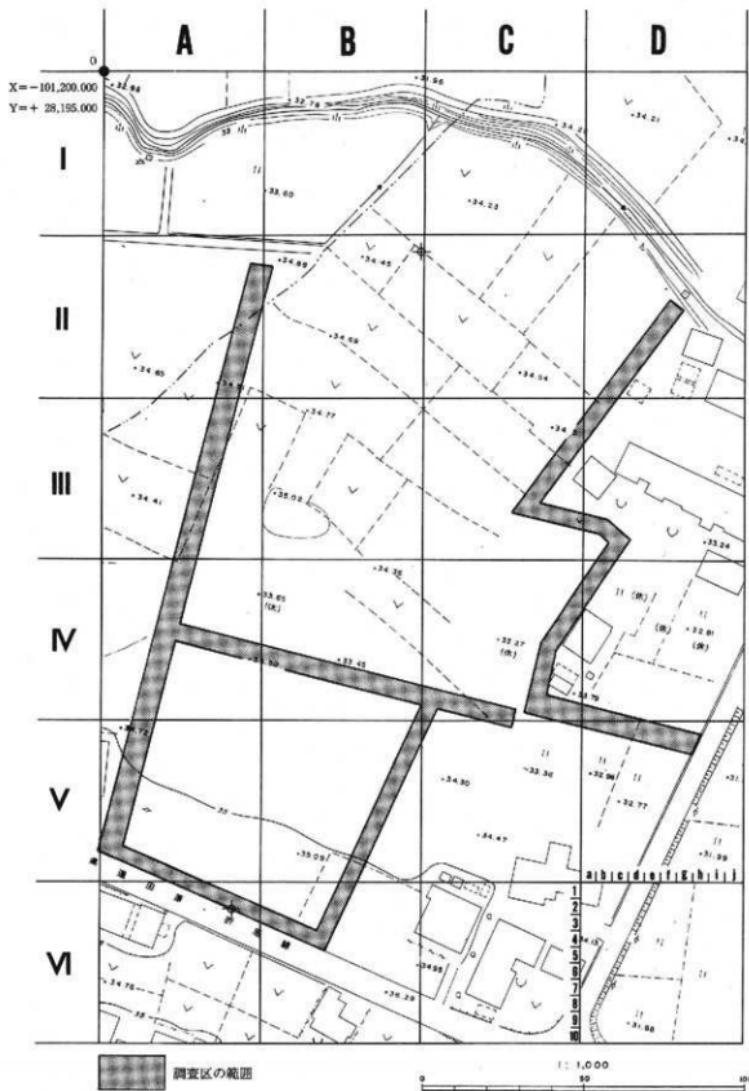
検出された遺構は、竪穴住居跡・住居状遺構は4分法、土坑類については2分法を原則として精査を行つたが、必要に応じてその他の方針も併用した。記録として必要な図面及び写真撮影は、精査の各段階に於いて、適宜これを行つた。

構跡については、平板測量を中心に行い、平面図を作成した。実測図の縮尺は1/20を基本とし、平面図と断面図を作成した。

遺構内出土の遺物については、埋土の場合、上位・中位・下位に分けて採り上げた。遺構外での出土遺物については、調査区毎あるいはグリッド毎に出土した層位を記して採り上げた。

##### (5) 写真撮影

野外調査での写真撮影は、6×7cm判カメラ（白黒）と35mm判カメラ（白黒・カラーリバーサルフィルム）を使用し、この他にポラロイドカメラ1台を、フィールドカード作成等のメモ的な用途に併用した。撮影にあたっては、撮影内容を記載した「撮影カード」を、対象物を撮影する前に撮影挿入し、整理の際の手間を削減した。また、調査終了前に、セスナ飛行機による航空撮影を実施した。



第5図 グリッド配置図

## 2. 室内整理

### (1) 作業内容

遺物の処理は、遺物の注記・接合・復元を優先させて行い、その次に、仕分け・登録・写真撮影・実測・トレース・拓本の作成を並行して進めた。その後、実測図の点検とトレースを行い、図版・写真図版の作成と順序立てて実施した。

### (2) 遺構

遺構配置図は、発掘調査時に行った平板測量による平面図に基づき、2分の1の縮尺図を作成した。

各遺構図面には、それぞれスケールを付しており、平面図に於ける方位矢印は、座標北を示している。

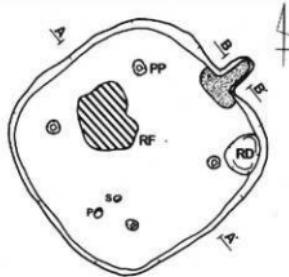
### (3) 遺物

土器の実測図は原則として、反転実測が可能なものと、一部には破片実測も併せて掲載した。遺物写真的番号は、遺物図版の番号と一致しており、掲載遺物の縮尺率については、図版中にそれぞれスケールを付して表示している。

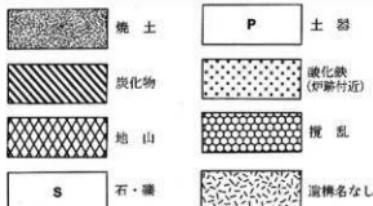
遺物写真的縮尺については、原則として2分の1で掲載している。

### (4) 凡例

実測図版中の遺構分布図や土器の調整方法等については、別掲の実測凡例図を参照して頂きたい。



-堅穴住居跡の例-

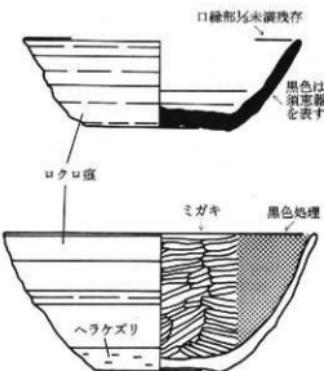
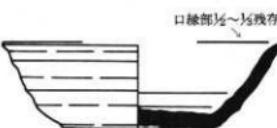
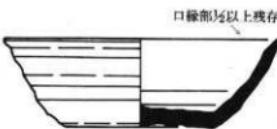
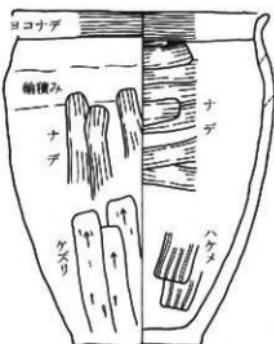


A-A' セクション・断面

RD 土塙

RF 流土

PP 柱穴状土塙



第6図 実測図凡例

## **IV 検出された遺構と出土遺物**

## IV 検出された遺構と出土遺物

検出された遺構は、堅穴住居跡 6 株、住居状遺構 1 株、溝跡 22 条、土坑 36 基、井戸跡 1 基、柱穴 4 基、柱穴状土坑 86 基、陥入穴 2 基、及び鍛冶炉または製鉄跡と推定される炉跡遺構が 1 箇所である。

### (1) 堅穴住居跡・住居状遺構

登録した堅穴住居跡は 6 株、住居状遺構 1 株である。これらは、出土遺物等から平安時代のものと推定している。

〔RA1 堅穴住居跡〕(第 7~9 図・写真図版 5~6)

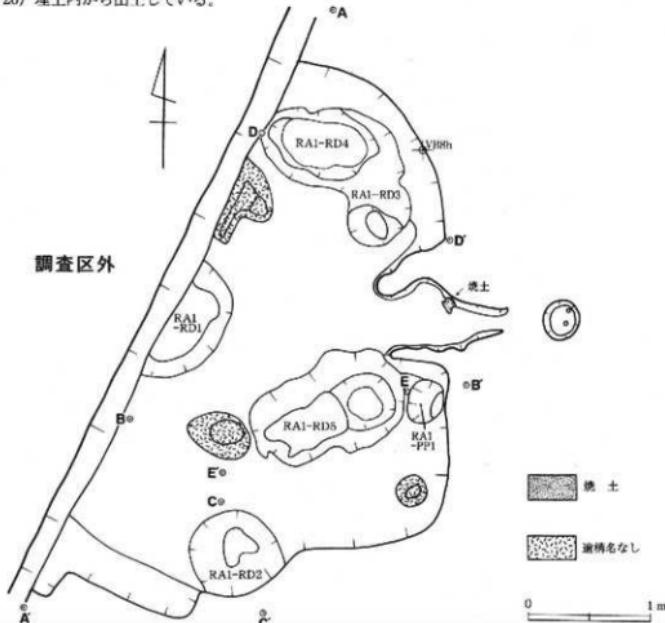
〈位置〉VB9 g グリッドに位置する。

〈規模〉長軸 4.9m・短軸 2.85m・壁高 6~29cm ではほぼ垂直に立ち上がる。

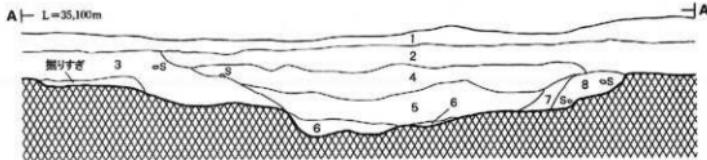
〈平面形〉隅丸方形を形成しているが、全体の約半分程度が検出されたに過ぎない。柱穴は見られず、床面の中央部と隅には性格が不明の土坑がある。貼り床の有無については、床面の一部分に、黒褐色土主体で地山ブロックおよび炭化物を多量に含んだ層が確認できたことから、その可能性が考えられる。

〈くまど〉本体は東東を向き、くまど両袖部分の残存状況は概ね良好である。先端部分から 25cm 離れた箇所には、煙道のない煙出しがあるが、その底部はごく浅く、おそらく検出されなかつた煙道も含めて、大部分は上部が削平されてしまったものと考えられる。くまど中央の底部からは、ほぼ完形品の土師器の坏(遺物 No.4)が出土し、また袖の部分からは、土師器片 2 点と須恵器片 1 点が出土している。

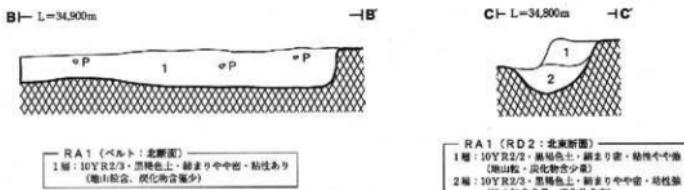
〈出土遺物〉ほぼ完形を保った土師器の坏を始めとして、土師器が 18 点 (No.1~17・19)、須恵器片が 2 点 (No.18・20) 埋土内から出土している。



第7図 RA1 (平面図)



RA 1 (西断面)	
1層	10Y R3/3 - 墓場色土・緑まり密・粘性あり (地山含多量)
2層	10Y R3/3 - 黒褐色土・緑まり密・粘性あり (炭化物含少)
3層	10Y R2/2 - 黒褐色土・緑まり密・粘性や少
4層	10Y R2/2 - 黒褐色土・緑まり密 (地山乾・炭化物含少)
5層	10Y R2/2 - 黑褐色土・粘性少・粘性や少 (地山乾・炭化物含少)
6層	10Y R2/2 - 黑褐色土・粘性少や中等 (地山乾・炭化物含少)
7層	10Y R2/2 - 黑褐色土・粘性少・粘性や少 (地山乾多量・炭化物含多)
8層	10Y R2/2 - 黑褐色土・新まり密・粘性強 (地山ブロック含多量)



RA 1 (ベルト：北断面)	
1層	10Y R2/3 - 黑褐色土・緑まりや中等・粘性あり (地山乾含・炭化物含少)

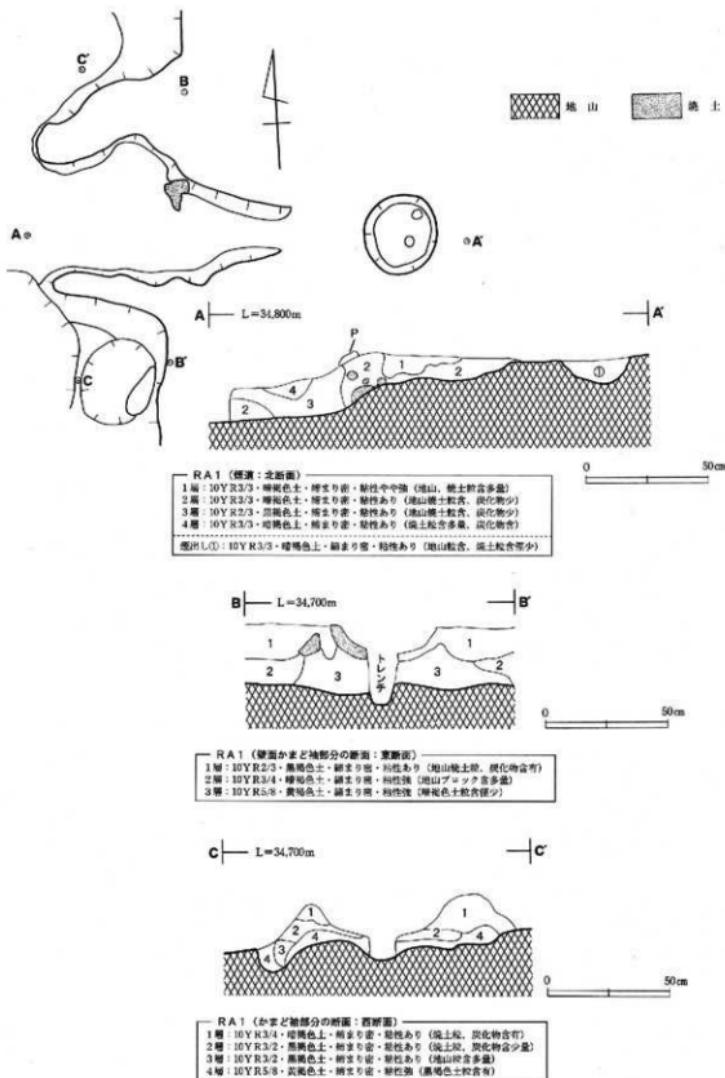
RA 1 (RD 2 : 北東断面)	
1層	10Y R2/2 - 黑褐色土・緑まり密・粘性や少 (地山乾・炭化物含少)
2層	10Y R2/3 - 黑褐色土・緑まりや中等・粘性強 (地山乾含多量・炭化物含多)



RA 1 (RD 3 : 北断面)	
1層	10Y R2/2 - 黑褐色土・緑まり少・粘性や少
2層	10Y R2/2 - 黑褐色土・緑まりやや少・粘性や少 (地山乾土乾・炭化物含少)
3層	10Y R3/4 - 墓場色土・緑まりやや少・粘性あり (地山乾含多量・硬土含少量)



第8図 RA 1 (断面図)



第9図 RA 1 (かまとど部分断面図)

〔RA 2 堅穴住居跡〕(第12図・写真図版6)

＜位置＞VA10eグリッドに位置する。  
＜規模＞長軸3.1m・壁高5cmでほぼ垂直に立ち上がる。  
＜平面形＞隅丸方形を形成するものと思われるが、壁面の一部のみしか検出されず詳細は不明である。  
＜かまど＞見られない。  
＜出土遺物＞埋土内からほぼ完形を保った須恵器の壺2点(No21・22)のほか、土師器の壺の一部(No24)と須恵器の壺または壺の一部(No23・25・26)が出土している。

〔RA 3 堅穴住居跡〕(第10・11図・写真図版7)

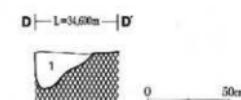
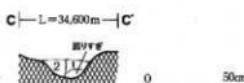
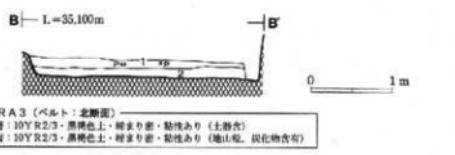
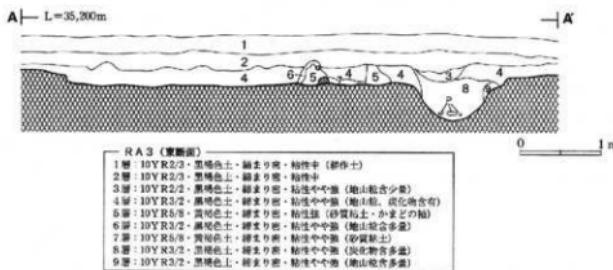
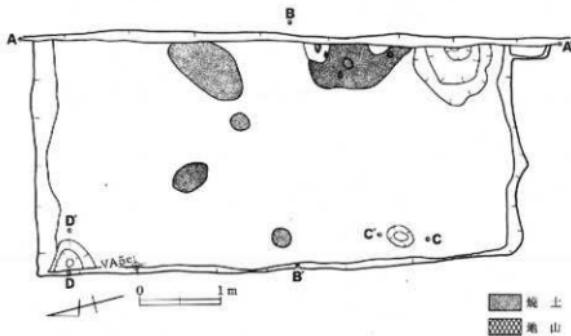
＜位置＞VA5c～VA6cグリッドに位置する。  
＜規模＞長軸5.6m・短軸2.7m・壁高9～12cmで緩やかに立ち上がる。  
＜平面形＞調査区幅が3mしかなく、その間に一部分が露出したものであるため、外形は不明である。遺構の隅に性格が不明の土坑と、中央部の床面に焼土が見られた。焼土は、付属する土坑の完掘作業と併せて精査を行ったが、極めて薄く分布していたに過ぎない。貼り床の有無については、埋土の堆積状況や、地山がほぼ鮮明に現れた滑らかな床面の状況等から、施されていない可能性が高い。  
＜かまど＞東側壁面に、調査区外へ伸びると思われるかまど的一部分が検出された。袖の左側部分が約30cm壁面から突き出し、その底部には焼土が検出された。  
＜出土遺物＞遺構内からのものとしては、当該遺跡で最も多くの遺物が出土した。埋土内や床面から土師器の壺(No27～36)や壺(No37～40・42～44)、須恵器の壺または壺(No41・45～48)および、長頸瓶の一部(No49)が見つかっている。

〔RA 4 堅穴住居跡〕(第12図・写真図版8)

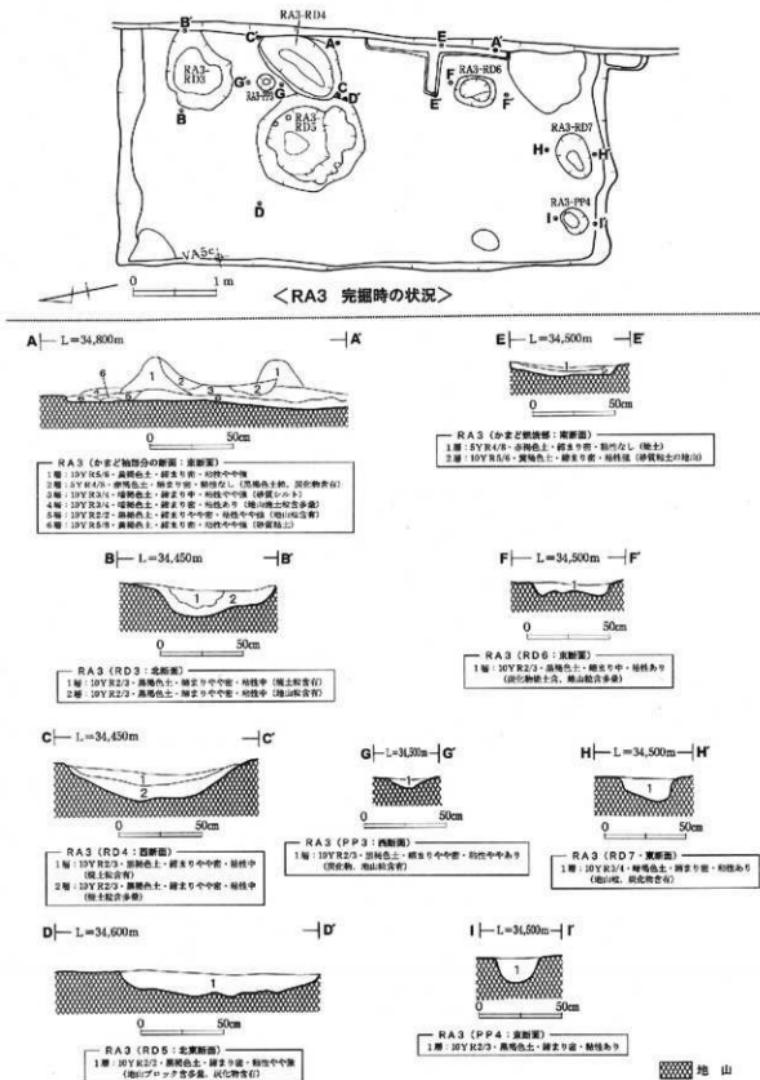
＜位置＞VIA1f～VIA1gグリッドに位置する。  
＜規模＞長軸4.5m・短軸1.5m・壁高6cmで立ち上がりは緩やかである。  
＜平面形＞調査区外からわずかに隅の部分が伸びている状況である。床面はごく浅く、最も深い部分でも40cmに満たないので、柱穴や土坑も見つからなかった。一部に近年の杭跡と思われる擾乱部分がある。  
＜かまど＞見られない。  
＜出土遺物＞埋土内から須恵器の壺の一部と思われる小片(No52)が出土している。

〔RA 5 堅穴住居跡〕(第13図・写真図版8)

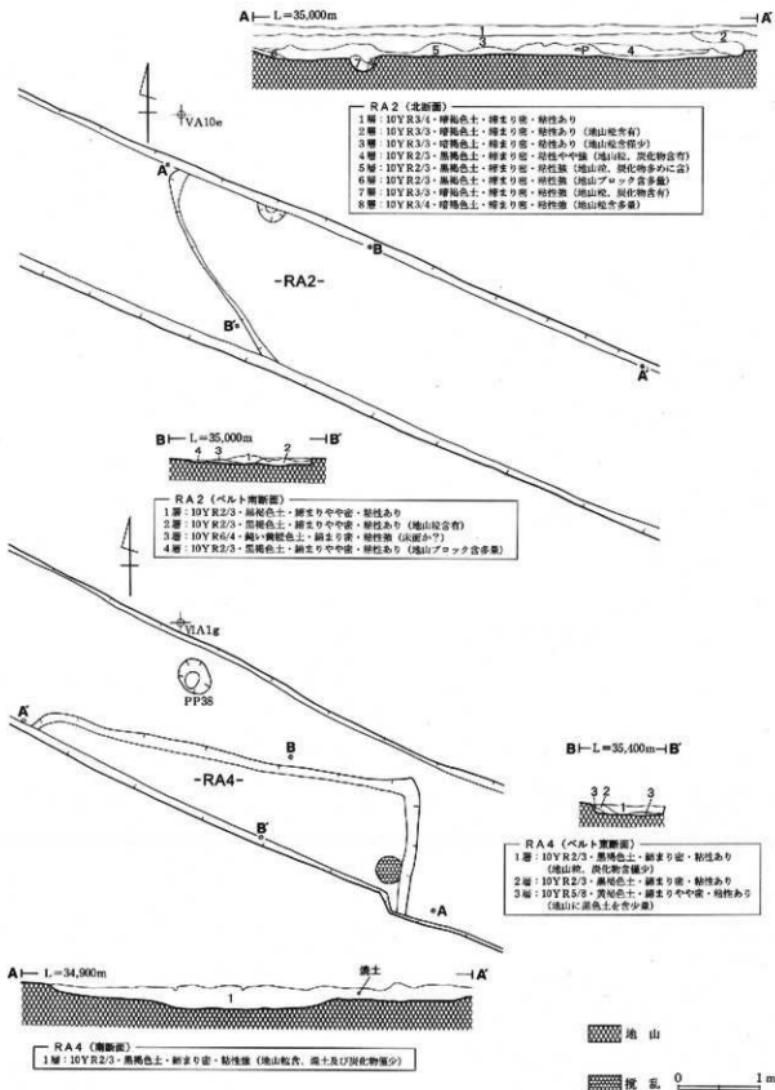
＜位置＞VIB3fグリッドに位置する。  
＜規模＞長軸4.1m・短軸1.1m・壁高16cmで緩やかに立ち上がる。  
＜平面形＞隅丸方形を形成していると思われるが、隅の一部分とそれに付随しながら調査区に平行して伸びる遺構も見られ、堅穴住居跡が重複していることも考えられる。  
＜かまど＞見られない。  
＜出土遺物＞出土していない。



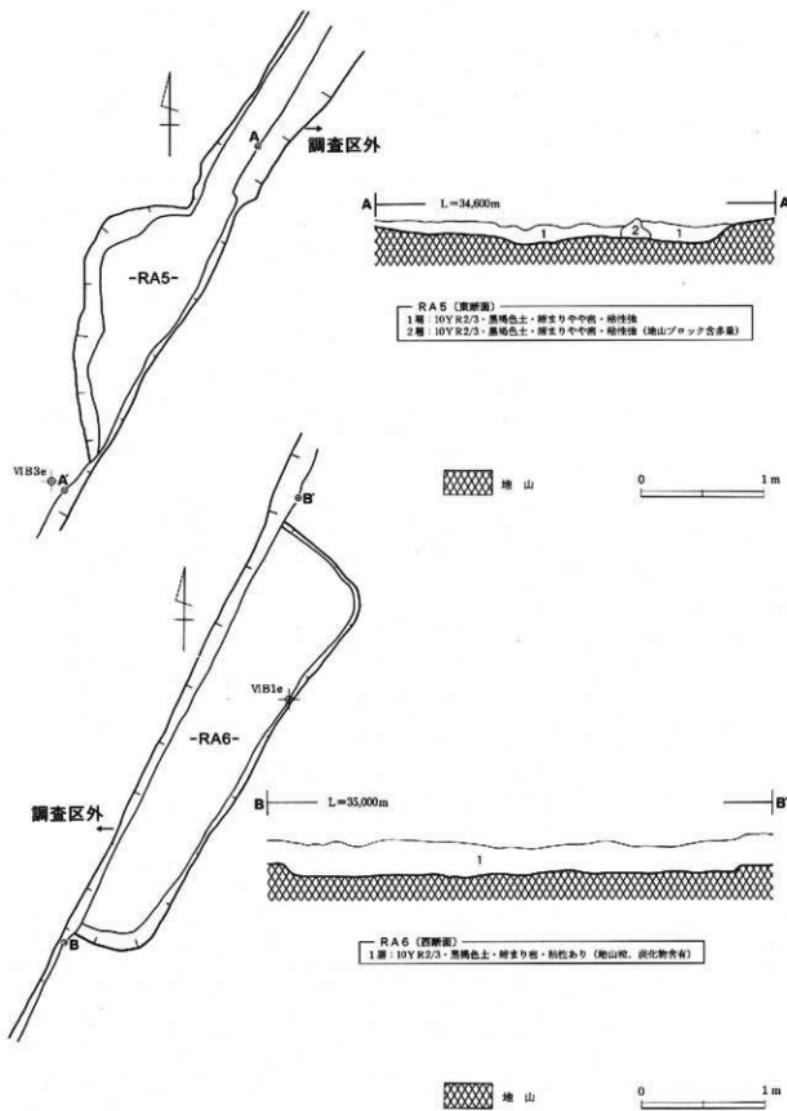
第10図 RA 3 (平面図及び断面図 (1))



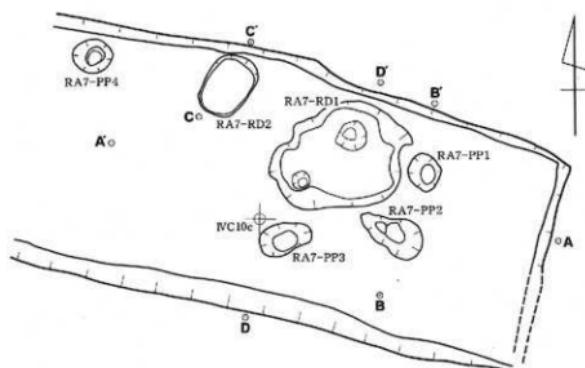
第11図 RA3 (平面図及び断面図 (2))



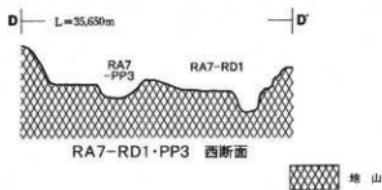
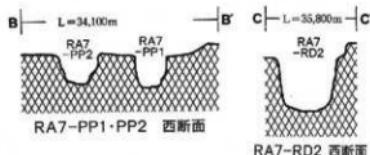
第12図 R A 2・R A 4 (平面図及び断面図)



第13図 RA5・RA6 (平面図及び断面図)



住居状造構（ベルト：南面図）  
1層：30YR2/3・黒褐色土・縦木5箇・地柱あり（地山料含有）



0 1 m

第14図 RA7住居状造構（平面図及び断面図）

〔RA6 塁穴住居跡〕(第13図・写真図版8)

＜位 置＞VI B 1 e グリッドに位置する。  
＜規 模＞長軸3.7m・短軸1m・壁高6~12cmで緩やかに立ち上がる。  
＜平面形＞隅丸方形を形成しているが、土坑や柱穴等は一切見られない。  
＜かまど＞見られない。  
＜出土遺物＞出土していない。

〔RA7 住居状遺構〕(第14図・写真図版8)

＜位 置＞IV C 9 c ~ IV C 10 d グリッドに位置する。  
＜規 模＞長軸約4.5m・短軸約2.1m・壁高8~10cmで緩やかに立ち上がる。  
＜平面形＞外形は不明であるが、わずかな床面の立ち上がりや土坑、柱穴状の土坑等が見られたため、住居状遺構として登録した。  
＜かまど＞みられない。  
＜出土遺物＞埋土内から、土師器の坏の底部(No53)、および甕の底部に木葉痕が残っているもの(No55)また、須恵器では坏の口縁部の一部(No54)や、甕の口縁部や底部(No56~58)など、比較的多くの遺物が出土している。

(2) 溝 跡

調査区の北東端に、検出された溝跡の大部分が集中(RG 1~10)し、その他は調査区の中央部及び南側と西側に分布している。北東端の溝跡は、ほぼ等間隔で南東方向に伸びるもの(RG 1~3・5~9)と、それらの溝を垂直に切るように伸びるもの(RG 4・10)とに分けられる。

岩手県教育委員会文化課では、この地点から約50m西側において試掘調査を行っているが、その時も同様の溝跡が検出されており、関連があるものと思われる。

北東部に集中する溝跡は出土遺物から、近世あたりに造られた新しい時代のもの、中央部及び南側の溝跡については、平安時代に造られたものと推定している。

この付近は、地域一帯に広がる胆沢扇状地の扇端部(地下水位が高く、湧水等にめぐまれている)に位置しているため、古くから集落の立地が見られるとともに水田耕作も行われており、灌漑用水路としての役割を担っていたものと考えられる。

〔RG1 1号溝〕(第15図・写真図版18)

＜位置・走行＞調査区北東端、II D 7 e グリッドに位置し、南東方向に伸びている。  
＜規 模＞全長2.1m・幅0.45m  
＜断面形＞凹凸の多い底面であるが、大部分は浅いU字状を呈している。  
＜埋 土＞褐色のシルトが主体を占める。  
＜遺 物＞出土していない。  
＜特 徴＞北西部は削平されおり、浅い柱穴状土坑(P P 5)が残るのみである。

〔RG 2 2号溝〕(第15図・写真図版18)

＜位置・走行＞調査区北東端、II D 7 e グリッドに位置し、南東方向に伸びている。  
＜規 模＞全長2.6m・幅0.5m  
＜断面形＞浅いU字状を呈している。  
＜埋 土＞褐色・暗褐色のシルトが主体を占める。  
＜遺 物＞出土していない。  
＜特 徴＞北西部はRG 4によって南北方向に切り取られている。

〔RG 3 3号溝〕(第15図・写真図版18)

＜位置・走行＞調査区北東端、II D 7 e グリッドに位置し、南東方向に伸びている。  
＜規 模＞全長2.6m・幅0.5m  
＜断面形＞浅いU字状を呈している。  
＜埋 土＞暗褐色のシルトが主体を占める。  
＜遺 物＞出土していない。  
＜特 徴＞中央部はRG 4によって南北方向に切り取られている。

〔RG 4 4号溝〕(第15図・写真図版18)

＜位置・走行＞調査区北東端、II D 7 e グリッドに位置し、南北方向へ調査区を斜めに伸びている。  
＜規 模＞全長5m・幅0.6m  
＜断面形＞浅いU字状を呈している。  
＜埋 土＞暗褐色のシルトが主体を占める。  
＜遺 物＞出土していない。  
＜特 徴＞RG 2・3・5を南北方向に切り取っており、前記の溝跡よりも後年に造られたものと推定している。

〔RG 5 5号溝〕(第15図・写真図版19)

＜位置・走行＞調査区北東端、II D 7 e グリッドに位置し、南東方向に伸びている。  
＜規 模＞全長2m・幅0.4m  
＜断面形＞浅いV字状を呈している。  
＜埋 土＞褐色のシルトが主体を占める。  
＜遺 物＞出土していない。  
＜特 徴＞RG 4と交差する付近で溝は消滅しているが、他の同様な溝跡の構造から鑑みて、より先に伸びていたものと推定される。

〔RG 6 6号溝〕(第15図・写真図版19)

＜位置・走行＞調査区北東端、II D 7 e グリッドに位置し、南東方向に伸びている。  
＜規 模＞全長2.9m・幅0.5m  
＜断面形＞ごく浅いV字状を呈している。

<埋 土>暗褐色のシルトが主体を占める。  
<遺 物>出土していない。  
<特 徴>RG10と調査区の壁際で垂直に交差しているが、埋土や交差する状況から同時代のものと推定している。

〔RG7 7号溝〕(第15図・写真図版19)

<位置・走行>調査区北東端、Ⅱ D 8 e グリッドに位置し、南東方向に伸びている。  
<規 模>全長2.9m・幅0.4m  
<断面形>ごく浅い皿状を呈している。  
<埋 土>暗褐色のシルトが主体を占める。  
<遺 物>底部付近から、土瓶の一部と思われる、19世紀頃に作られた大堀相馬産の陶器片(No.91)が出土している。  
<特 徴>RG10と調査区の壁際で垂直に交差しているが、埋土や交差する状況から同時代のものと推定している。

〔RG8 8号溝〕(第15図・写真図版19)

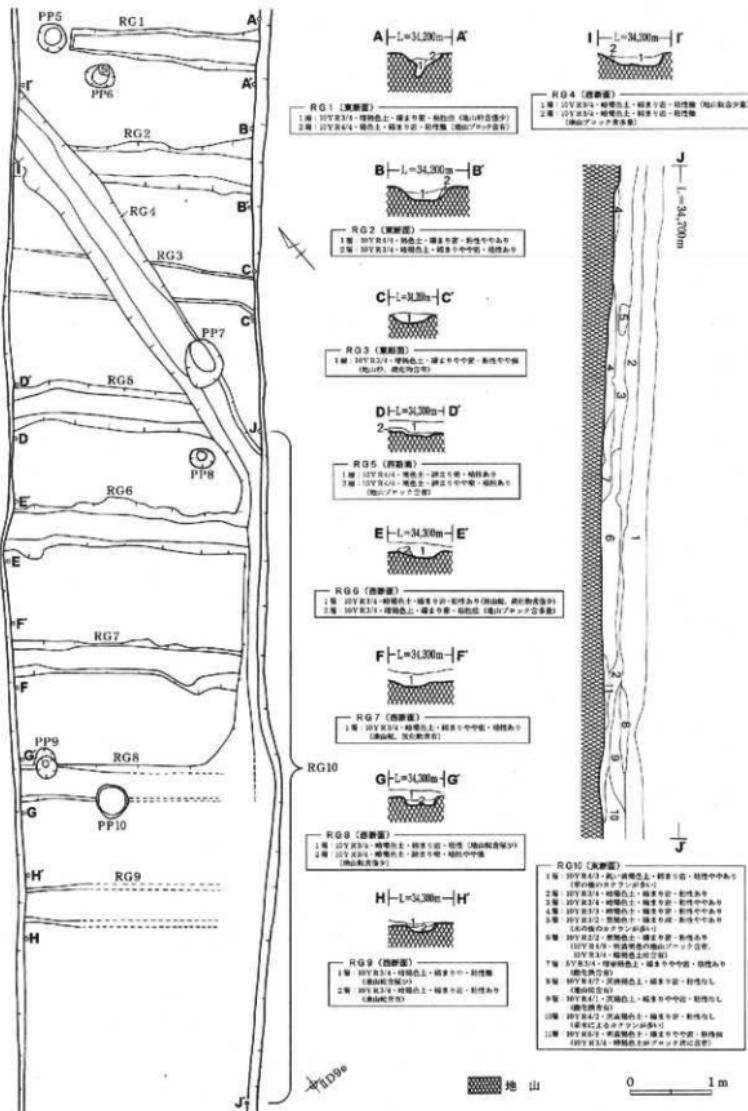
<位置・走行>調査区北東端、Ⅱ D 8 e グリッドに位置し、南東方向に伸びている。  
<規 模>全長約2m・幅約0.4m  
<断面形>浅いU字状を呈している。  
<埋 土>暗褐色のシルトが主体を占める。  
<遺 物>出土していない。  
<特 徴>溝跡のほぼ中央部から境界が不明瞭になっているが、埋土の状況等から、RG10と調査区の壁際で垂直に交差していたものと思われる。

〔RG9 9号溝〕(第15図・写真図版19)

<位置・走行>調査区北東端、Ⅱ D 8 d グリッドに位置し、南東方向に伸びている。  
<規 模>全長約0.8m・幅約0.4m  
<断面形>浅いU字状を呈している。  
<埋 土>暗褐色のシルトが主体を占める。  
<遺 物>出土していない。  
<特 徴>全体の約3分の2程度が削平を受けているが、RG8とほぼ同様な形態をしているものと考えられる。

〔RG10 10号溝〕(第15図・写真図版19)

<位置・走行>調査区北東端、Ⅱ D 8 e グリッドに位置し、南西方向に伸びている。  
<規 模>全長約8m・幅約0.2m  
<断面形>U字状を呈していると思われる。  
<埋 土>褐色系統のシルトが主体を占める。



第15図 北端部溝跡（平面図及び断面図）

<遺物>出土していない。

<特徴>調査区の壁面際に検出された溝跡である。断面の約3分の1程度しか検出できていないため詳細は不明であるが、埋土や遺構の交差状況等から、RG 6～9と関連するものと推定している。

〔RG11 11号溝〕(第16図・写真図版20)

<位置・走行>調査区北東部、Ⅲ D 4 a グリッドに位置し、ほぼ南北方向に伸びている。

<規模>全長3.2m・幅1.1m

<断面形>ほぼU字状を呈している。

<埋土>灰黄褐色のシルトが主体を占める。

<遺物>出土していない。

<特徴>この付近に分布する溝跡では、比較的大きい部類に区分される。

〔RG12 12号溝〕(第16図・写真図版20)

<位置・走行>調査区北東部、Ⅲ D 4 a グリッドに位置し、南東方向に伸びている。

<規模>全長3 m・幅0.6m

<断面形>浅い皿状を呈している。

<埋土>暗褐色のシルトが主体を占める。

<遺物>出土していない。

<特徴>規模は、調査区北東端のRG 1～9とほぼ同等である。

〔RG13 13号溝〕(第17図・写真図版20)

<位置・走行>調査区北東部、Ⅲ C 5 j グリッドに位置し、南西方向に伸びている。

<規模>全長約8.5m・幅0.9m

<断面形>ほぼU字状を呈している。

<埋土>褐色系統のシルトが主体を占める。

<遺物>出土していない。

<特徴>規模や時期は、位置や埋土等から、おそらく調査区北東端のRG 10とほぼ同等・同時期のものと推定している。

〔RG14 14号溝〕(第18図・写真図版20)

<位置・走行>調査区東側、Ⅲ C 8 j グリッドに位置し、南西方向に伸びている。

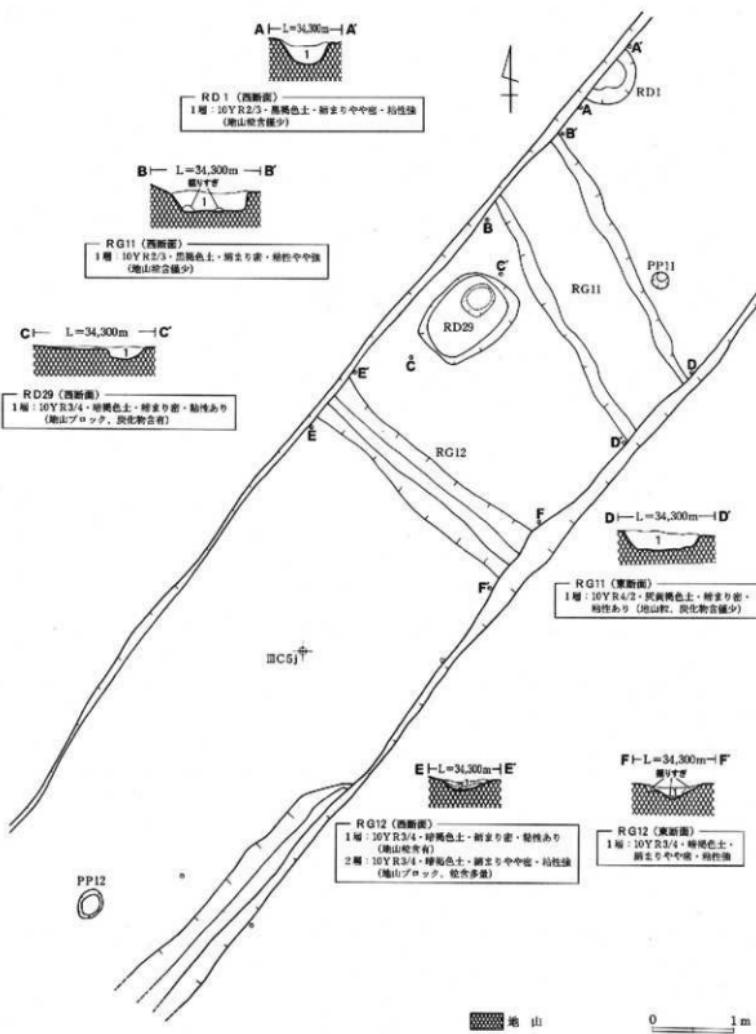
<規模>全長3.5m・幅1.1m

<断面形>浅いU字状を呈している。

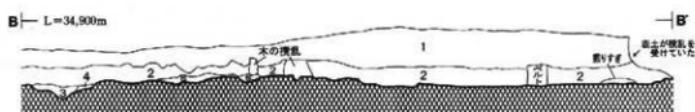
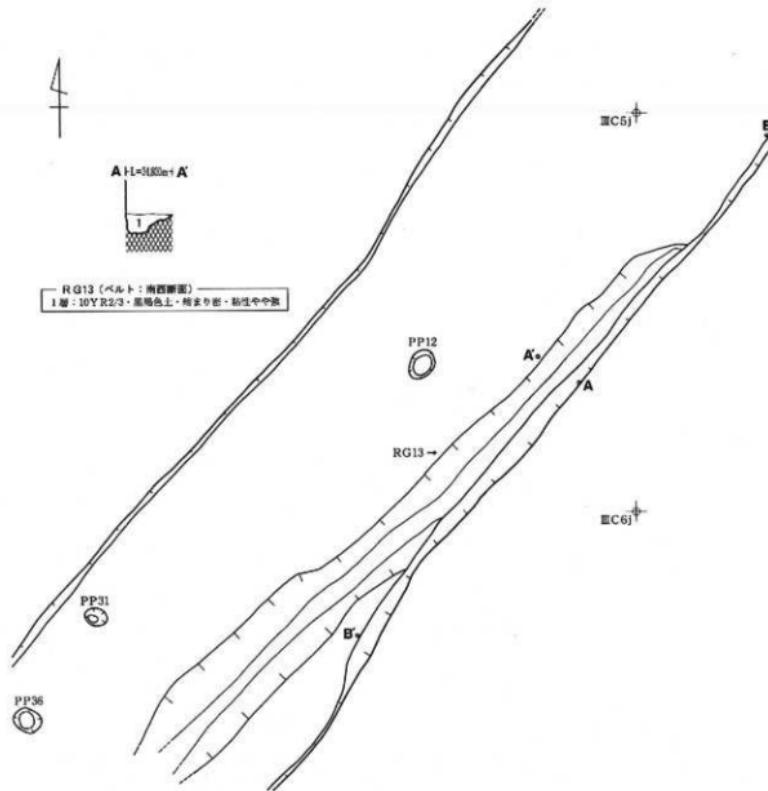
<埋土>暗褐色のシルトが主体を占める。

<遺物>出土していない。

<特徴>規模は、調査区北東部のRG 11とほぼ同等である。



第16図 北端部 R G11・12・土坑・柱穴状土坑（平面図及び断面図）

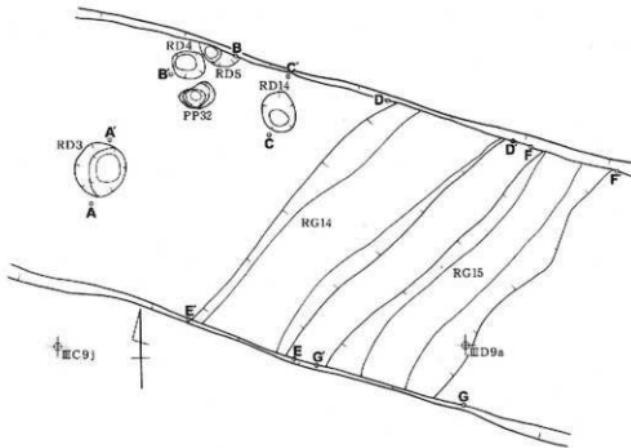


R G13 (東断面)

- 1層: 10YR 4/3 - 黄褐色土・稍まり密・粘性なし (軟化軟弱)
- 2層: 10YR 4/3 - 黄褐色土・稍まり密 (地山軟弱)
- 3層: 10YR 3/4 - 黄褐色土・稍まり密 (粘性ややあり)
- 4層: 10YR 5/6 - 黄褐色土・稍まりやや密・弱化軟弱
- 5層: 10YR 3/2 - 黄褐色土・稍まり密 (粘性なし)

地 山 0 1 m

第17図 R G13 (平面図及び断面図)



RD 3 (西断面) —— L=33,900m —— A'—A  
1層: 10YR 2/3・黒褐色土・緑まり岩・粘性中  
(地山板、炭化物含少量)



RD 4・5 (東断面) RD 4=1層・RD 5=2層  
1層: 10YR 2/3・黒褐色土・緑まり岩・粘性あり  
(地山板含少量)  
2層: 10YR 2/2・黒褐色土・緑まり岩・粘性あり  
(地山板、炭化物含微量)



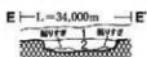
RD 14 (西断面) —— L=33,900m —— C'—C  
1層: 10Y 2/2・黒褐色土・緑まり岩・粘性強  
(地山板、炭化物含少)  
2層: 10Y R7/8・黄褐色土・緑まり岩・粘性中  
(10Y R4/4褐色土含有)



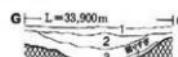
RG 14 (北断面) —— L=34,000m —— D'—D  
1層: 10Y R4/4・褐色土・緑まり岩・粘性あり  
(地山土)  
2層: 10Y R3/4・緑褐色土・緑まり岩・粘性あり  
(地山板含)  
3層: 10Y R3/4・緑褐色土・緑まり岩・粘性強  
(地山ブロック含多量)



RG 15 (北断面) —— L=33,900m —— F'—F  
1層: 10Y R3/4・緑褐色土上・緑まり岩・粘性あり  
2層: 10Y R3/4・緑褐色土・緑まり岩・粘性あり  
(地山板含)  
3層: 10Y R3/4・緑褐色土・緑まり岩・粘性強  
(地山ブロック含少)



RG 14 (東断面) —— L=34,000m —— E'—E  
1層: 10Y R4/4・褐色土・緑まり岩・粘性あり  
(地山土)  
2層: 10Y R3/4・緑褐色土・緑まり岩・粘性あり  
(地山板含有)



RG 15 (東断面) —— L=33,900m —— G'—G  
1層: 10Y R3/4・緑褐色土上・緑まり岩・粘性あり  
2層: 10Y R3/4・緑褐色土・緑まり岩・粘性あり  
(地山板含)  
3層: 10Y R3/4・緑褐色土・緑まり岩・粘性あり  
(地山板含少)

地 山      0      1 m

第18図 北東部溝跡（平面図及び断面図）

〔RG15 15号溝〕(第18図・写真図版21)

＜位置・走行＞調査区東側、III C 8 j ~ III D 8 a グリッドに位置し、南西方向に伸びている。  
＜規模＞全長3.5m・幅1.2m  
＜断面形＞浅い皿状を呈している。  
＜埋 土＞暗褐色のシルトが主体を占める。  
＜遺 物＞底部から、陶器で19世紀に作られたと思われる在地産の片口らしきもの(Na92)が出土している。  
＜特 徴＞規模は、隣接するRG14よりも小さい。

〔RG16 16号溝〕(第22図・写真図版21)

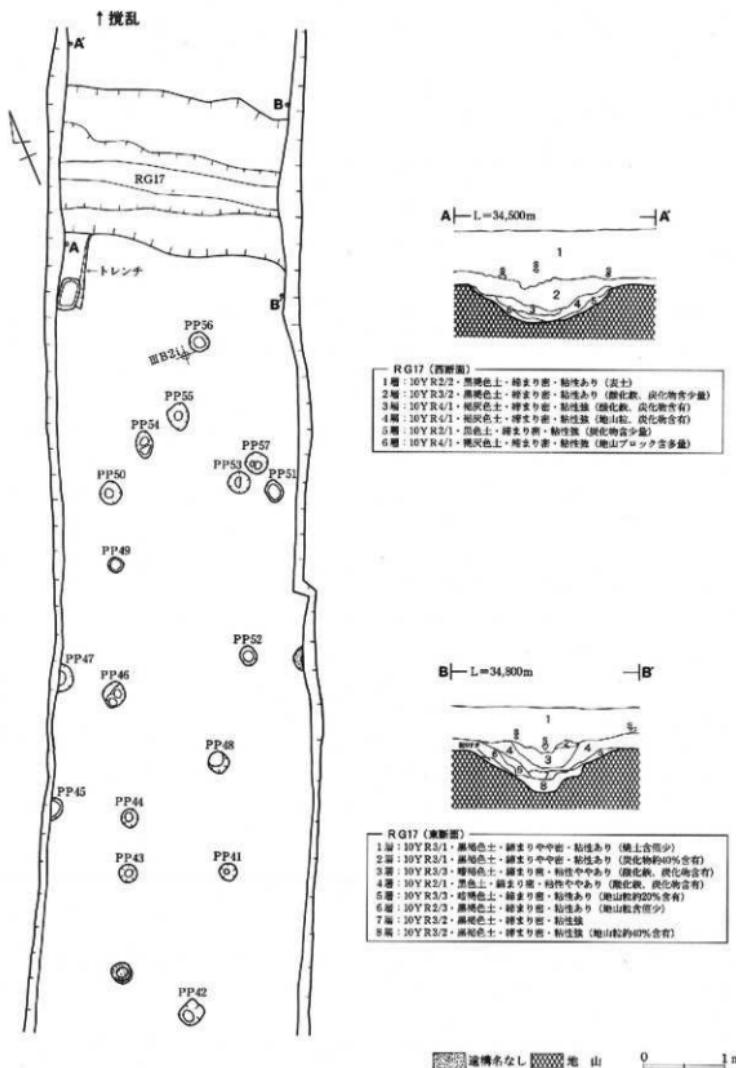
＜位置・走行＞調査区東側、IV C 6 h グリッドに位置し、南東方向に伸びている。  
＜規模＞全長2.2m・幅1.1m  
＜断面形＞凹凸を持った、やや深いU字状を呈している。  
＜埋 土＞黒褐色のシルトが主体を占める。  
＜遺 物＞埋土の上部から須恵器と土師器の壺の一部(Na70・71)と、ロクロ処理が施された須恵器の壺または甕の一部(Na72)が出土している。  
＜特 徴＞規模は、検出された他の溝跡と比較しても大きい部類に属し、隣接する井戸跡との関連も考えられる。

〔RG17 17号溝〕(第24図・写真図版21)

＜位置・走行＞調査区中央部、III B 2 i ~ III B 2 j グリッドに位置し、南東方向に伸びている。  
＜規模＞全長3m・幅1.8m  
＜断面形＞凹凸を持った、ゆるやかな椀状を呈している。  
＜埋 土＞上・中層には黒褐色のシルト、底部付近は粘土が分布している。  
＜遺 物＞住居を除いた遺構の中で、最も多くの遺物が出土している。土師器や須恵器の壺の一部(Na73~75)や、土師器・須恵器の甕または壺の一部(Na76~78)が見つかっている。  
＜特 徴＞規模は、検出された他の溝跡と比較しても大きい部類に属する。

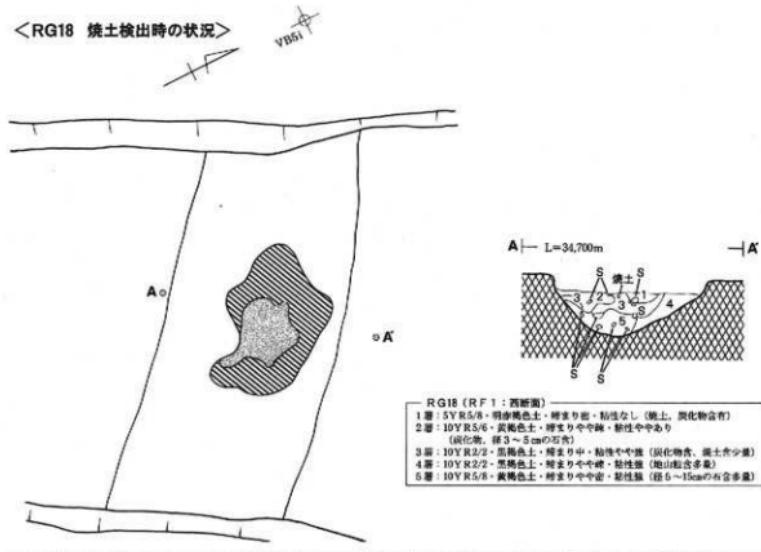
〔RG18 18号溝〕(第25図・写真図版21)

＜位置・走行＞調査区中央部、VB 5 i グリッドに位置し、南東方向に伸びている。  
＜規模＞全長3.2m・幅1.5m  
＜断面形＞凹凸を持った、ゆるやかな椀状を呈している。  
＜埋 土＞黒褐色のシルトと黄褐色のシルトが主体を占める。  
＜遺 物＞出土していない。  
＜特 徴＞規模は、RG17とほぼ同程度であるが、溝跡の中央部表面に焼土と炭化物が分布していた。完掘を含めた精査の結果、表面に浅く露出していた程度であった。図版25図では、検出時と完掘時の状況を比較して掲載している。

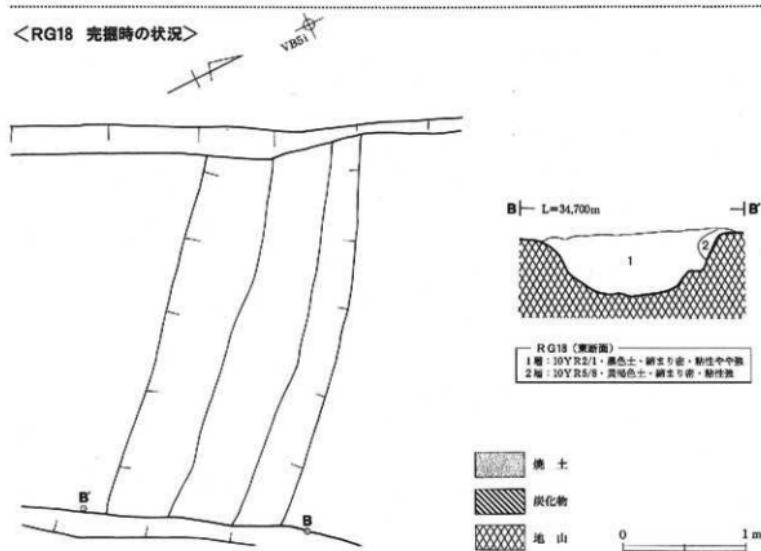


第19図 RG17・柱穴状土坑群（平面図及び断面図）

<RG18 焼土検出時の状況>



<RG18 完掘時の状況>



第20図 RG18 (平面図及び断面図)

〔RG19 19号溝〕(第26図・写真図版22)

＜位置・走行＞調査区中央部、VB 6 h～VB 7 h グリッドに位置し、南東方向に伸びている。  
＜規模＞全長3.1m・幅1.1m  
＜断面形＞凹凸を持った、浅い皿状を呈している。  
＜埋 土＞黒褐色のシルトが主体を占める。  
＜遺 物＞出土していない。  
＜特 徴＞規模は、RG17・18と比較してやや小規模であるが、溝跡の両側には、柱穴状の土坑が検出された。これらは、溝跡を跨ぐようにして造られた小さな橋脚の一部とも考えられるものの、詳細は不明である。

〔RG20 20号溝〕(第23図・写真図版22)

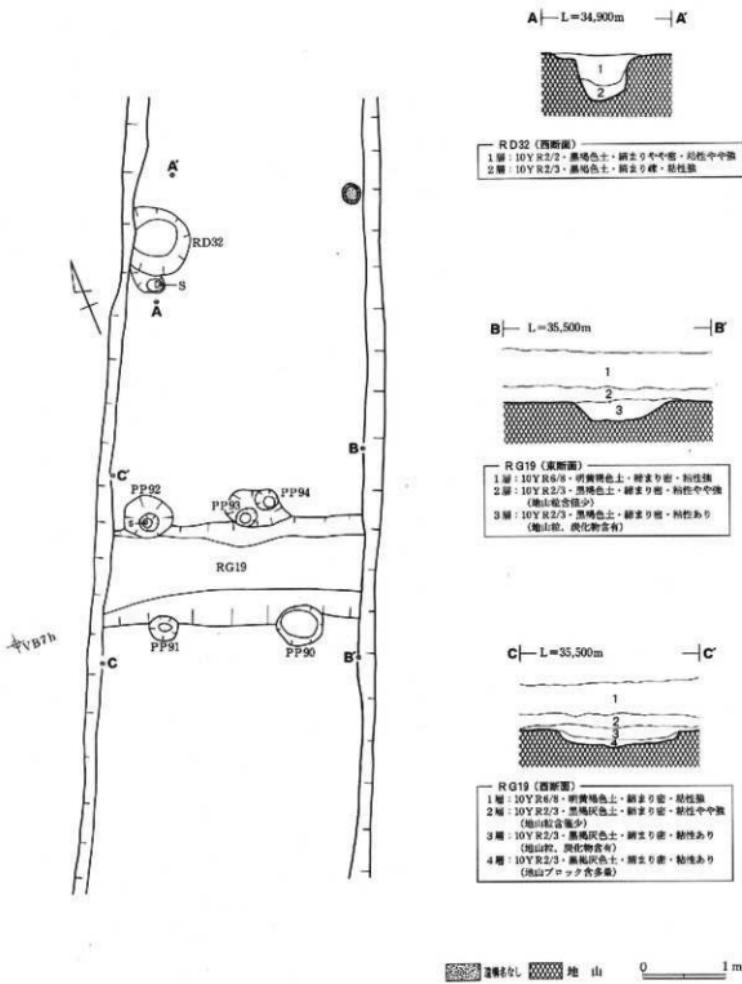
＜位置・走行＞調査区中央部、III C 10 c グリッドに位置し、北側に凸状の湾曲した形状を呈している。  
＜規模＞全長7.3m・幅0.4～0.5m  
＜断面形＞部分的に凹凸がある、浅いU字状を呈している。  
＜埋 土＞黒褐色のシルトが主体を占める。  
＜遺 物＞埋土の中位から、須恵器の甕の一部(Na79)が出土している。  
＜特 徴＞溝跡の中で、唯一湾曲した形状を呈する遺構である。周溝等であることとも考えられるが、調査範囲がごく狭いものであるため、性格を決定する材料に乏しく、詳細は不明である。

〔RG21 21号溝〕(第30図・写真図版22)

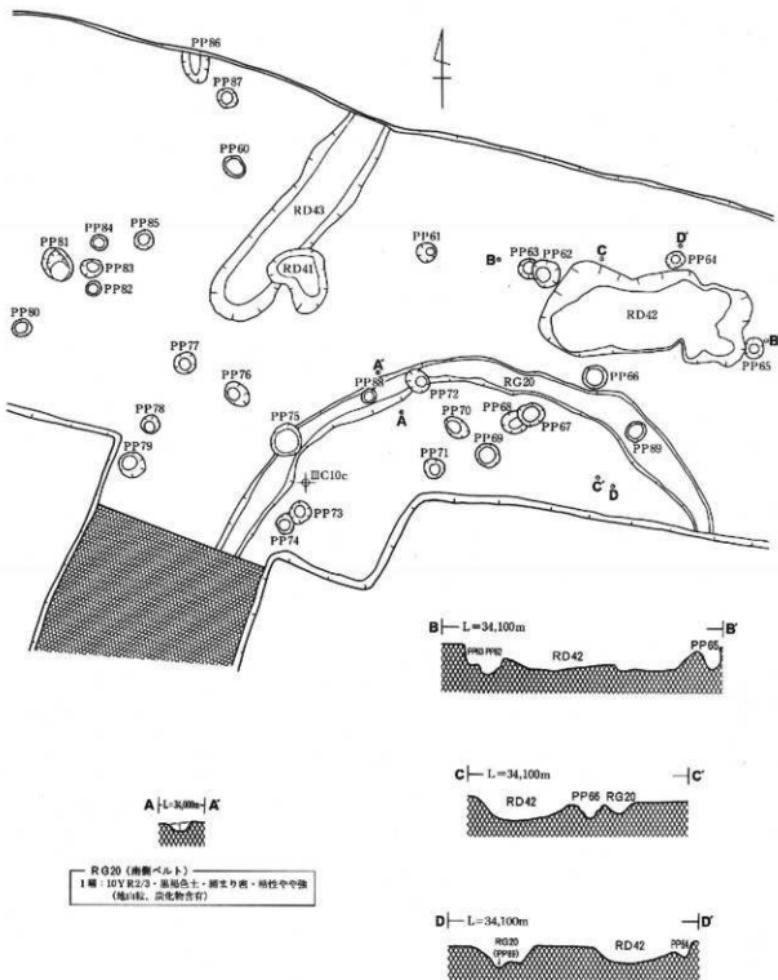
＜位置・走行＞調査区北東部、III D 9 b～III D 9 c グリッドに位置し、南東方向に伸びている。  
＜規模＞全長8.2m・幅0.6m  
＜断面形＞ごく浅い皿状を呈している。  
＜埋 土＞暗褐色のシルトが主体を占めるが、この溝跡の表層には部分的に、鉄分が酸化した状態で集積していた。  
＜遺 物＞出土していない。  
＜特 徴＞ごく浅い溝跡であるが、隣接する位置に炉跡が検出されており、検出状況や埋土等から互いに関連する遺構であることが考えられる。  
なお、詳細は後述する炉跡に関する項を参照して頂きたい。

〔RG22 22号溝〕(第28図・写真図版22)

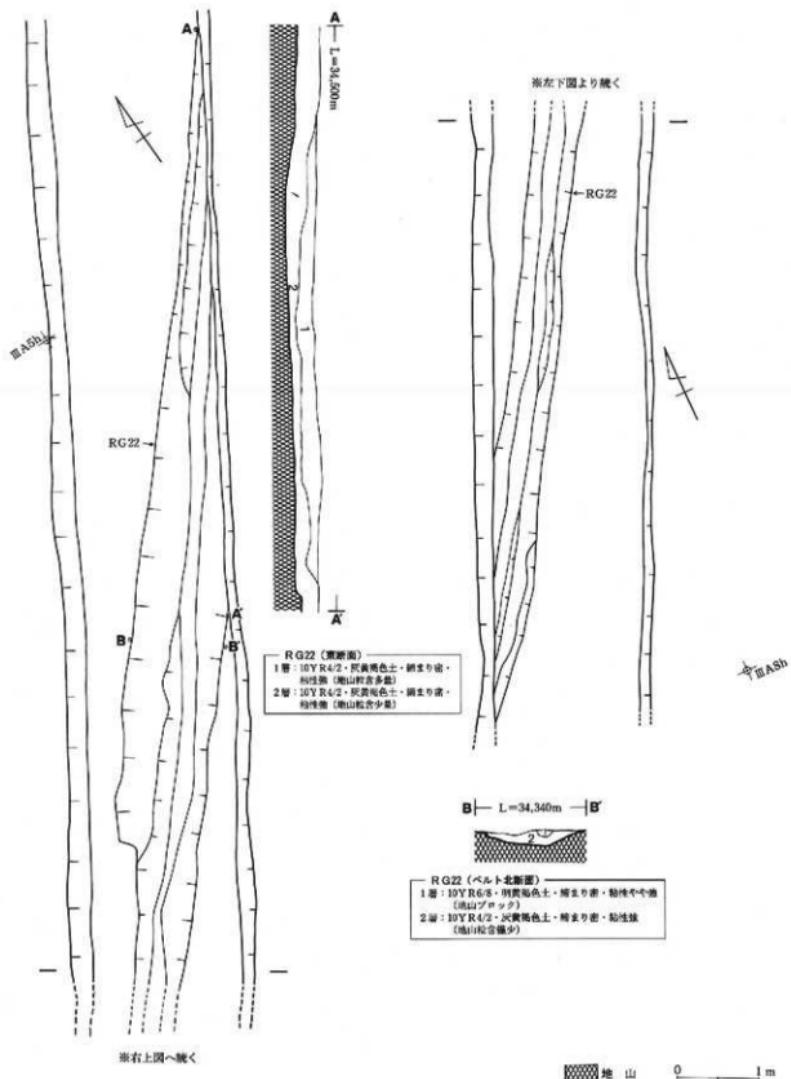
＜位置・走行＞調査区西部、III A 5 i～III A 7 g グリッドに位置し、南西方向に伸びている。  
＜規模＞全長19.5m・幅1.4m  
＜断面形＞浅い皿状を呈している。  
＜埋 土＞灰黄褐色のシルトが主体を占める。  
＜遺 物＞出土していない。  
＜特 徴＞調査区西部で検出された比較的規模の大きな浅い溝跡である。この溝跡付近には、他の遺構が見当たらず、独立したものとなっている。



第21図 中央部 RG19・RD32 (平面図及び断面図)



第22図 中央部 R G20・柱穴状土坑群(平面図及び断面図)



第23図 RG22 (平面図及び断面図)

### (3) 土坑(36基)

規模の大小に顕著な差異は特に見られないものが大半を占めているが、一般的に、柱穴状土坑と比較して規模が大きいと思われるものは、土坑として取り上げることとした。

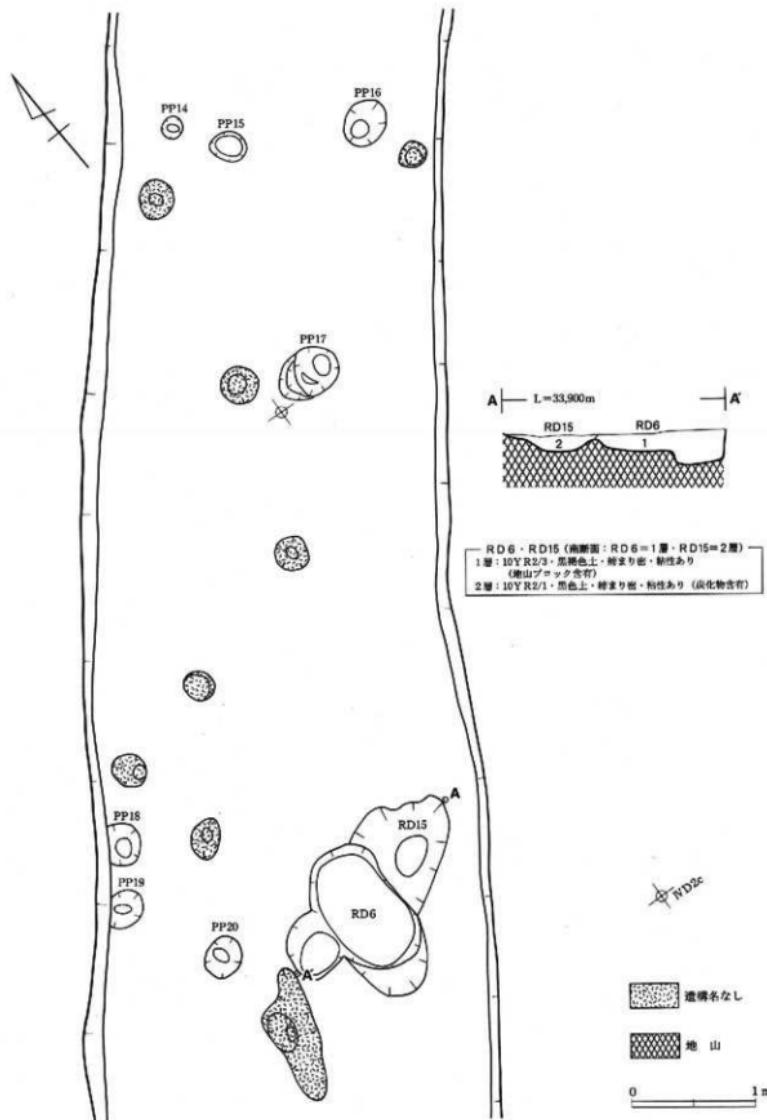
分布の状況は、主に調査区中央東側に集中し、この地域では、合わせて柱穴状土坑の分布も顕著であり、何らかの関係があるものと推測される。

遺物の出土が見られたのは、上記の土坑が集中する調査区中央東側に於いてであるが、磨滅したものが多くなっている。遺物の出土が見られたものを始め、遺物がなく時期等を特定できなかった土坑の多くは、埋土等から奈良・平安時代のものがほとんどであると推定している。

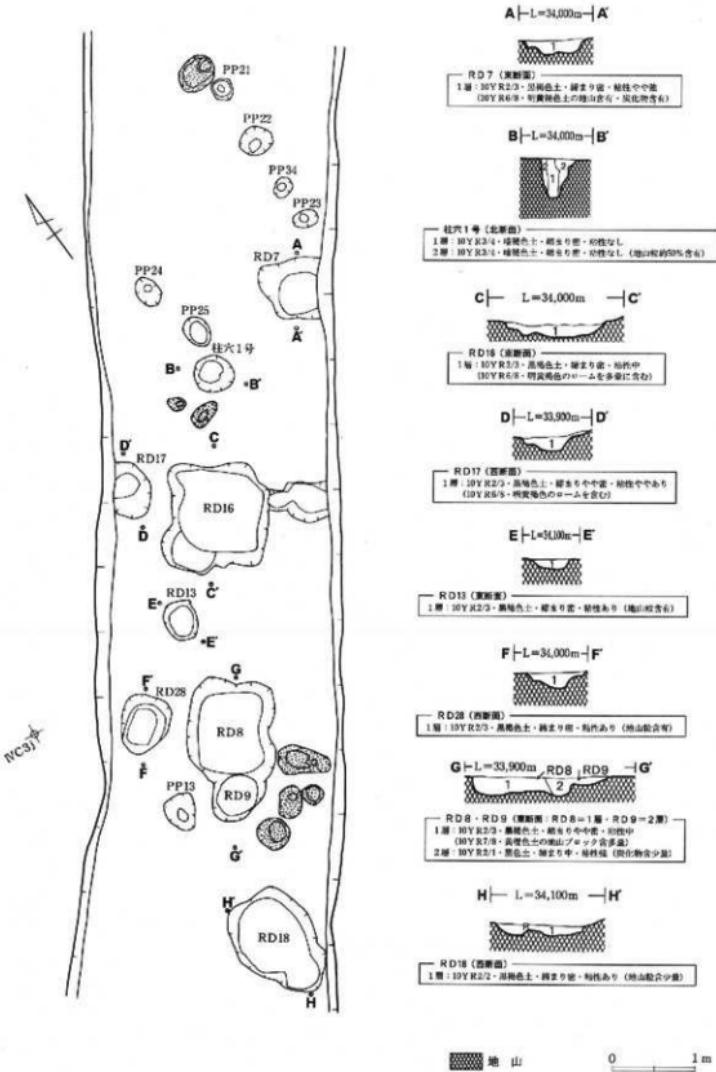
第1表 土坑一覧

No.	径 cm	深さ cm	形 態	備 考
1	62 × 38	21.3	円形	時期は不明
3	65 × 61	27.9	円形	埋土上位と底面から土師器(No.59～61)が出土
4	38 × 34	9.5	楕円形	埋土下位から須恵器(No.62)が出土
5	53 × 20	8.9	円形と楕円形	時期は不明
6	133 × 102	13.2	複合楕円形	埋土上位から須恵器(No.63)が出土
7	75 × 65	16.2	楕円形	時期等は不明
8	100 × 100	25.1	不整な楕円形	時期等は不明
9	58 × 58	11.3	円形	時期等は不明
10	165 × 135	11.6	不整な楕円形	埋土上位から土師器(No.64)が出土
11	95 × 72	20.6	楕円形	時期等は不明
12	126 × 103	28.6	楕円形	時期等は不明
13	48 × 40	5.6	円形	時期等は不明
14	50 × 40	20.7	楕円形	埋土上位と中位から土師器(No.65～66)が出土
15	80 × 74	8.0	複合楕円形	時期等は不明
16	123 × 120	20.5	不整な楕円形	時期等は不明
17	63 × 43	25.2	円形	時期等は不明
18	137 × 100	11.1	楕円形	時期等は不明
19	90 × 72	53.0	円形	時期等は不明
20	115 × 90	16.1	楕円形	時期等は不明
21	57 × 53	27.1	円形	時期等は不明
22	218 × 60	10.6	不整な楕円形	時期等は不明
23	78 × 60	24.0	円形と楕円形	時期等は不明
24	86 × 43	12.5	複合円形	時期等は不明
25	60 × 50	22.7	円形	時期等は不明
26	70 × 52	23.0	複合円形	時期等は不明
27	107 × 60	26.5	複合円形	時期等は不明
28	74 × 60	9.8	楕円形	時期等は不明
29	118 × 89	18.0	楕円形	時期等は不明
31	51 × 30	16.6	楕円形	時期等は不明
32	102 × 67	58.3	複合円形	時期等は不明
33	130 × 70	29.5	不整な楕円形	時期等は不明
34	45 × 18	13.5	楕円形	時期等は不明
35	72 × 42	16.7	円形	時期等は不明
40	127 × 108	37.9	楕円形	埋土下位から土製の羽口片(図版31)が出土
41	80 × 50	41.7	不整な楕円形	時期等は不明
42	245 × 98	21.9	不整な楕円形	上位に土師器(No.67) 中位に綠釉陶器(No.89)

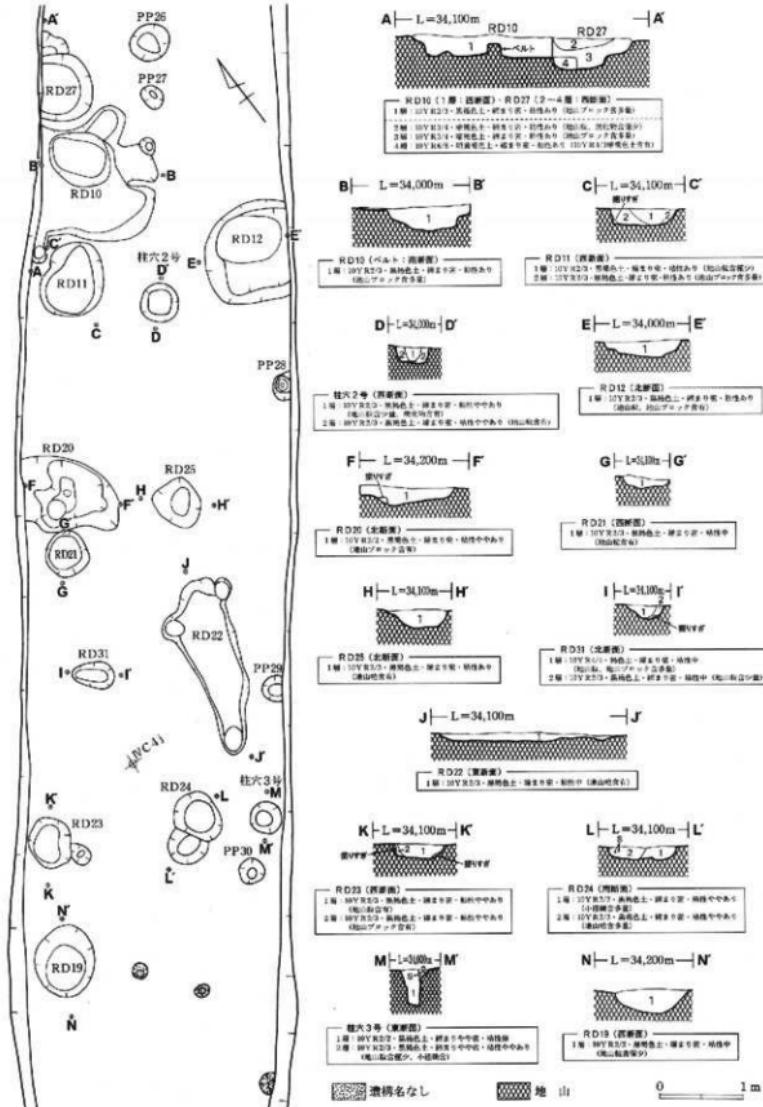
※No.2・30・36～39の土坑は、規模等から再検討した結果、登録から除外した。



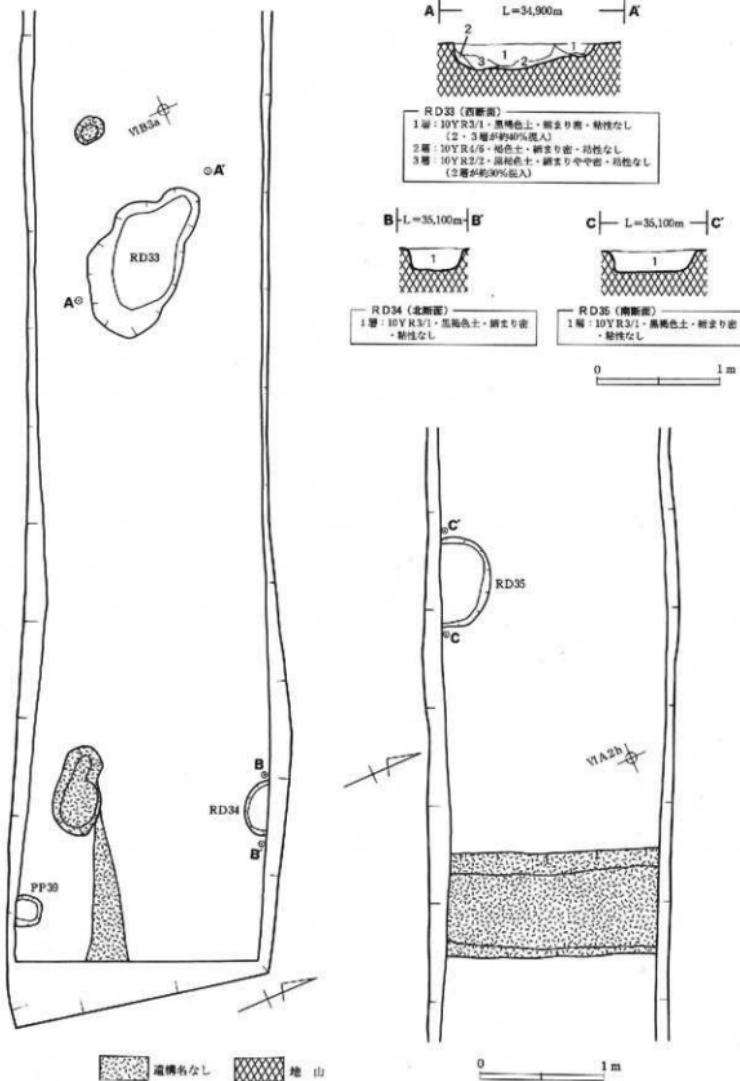
第24図 東端部(1)土坑・柱穴状土坑群 (平面図及び断面図)



第25図 東端部②土坑・柱穴状土坑群（平面図及び断面図）



第26図 東端部(3)土坑・柱穴状土坑群 (平面図及び断面図)



第27図 南端部・県道脇の造構（平面図及び断面図）

#### (4) 井戸跡

調査区中央東側に位置するIV C 6 g ~ IV C 6 h グリッド付近に、ほぼ円形をした形態をもつ長軸1.1m・短軸0.55m・深さ約1.5mの井戸跡が検出された。上層部は、黒褐色土が主体となっているが、中・下層にかけてはグライ化した粘土層が分布する、井戸跡特有の様相を呈している。

最下層の底部には、グライ化した層に保護されたワッパの下部 (No94) が出土した。使用された素材は、後に行なった化学分析結果から、胴の部分は「ヒノキ属」・止め具を「マツ属」・底部に「スギ」をそれぞれ使用しているということが判明した。VI章の出土材樹種同定報告書によると、このような異種材の組み合わせによる構成はとりわけ希有な例ではなく、江刺市落合Ⅱ遺跡（岩手県教育委員会1980）や水沢市脇沢城跡（沢辺1977）からの試料に於いても、形態を含めほぼ同様な組み合わせのものが出土しているという。その他の出土遺物としては、埋土中位から須恵器の壺と思われる小片 (No68) が合わせて見つかっているが、井戸を囲む木枠等の痕跡らしきものは確認できなかった。

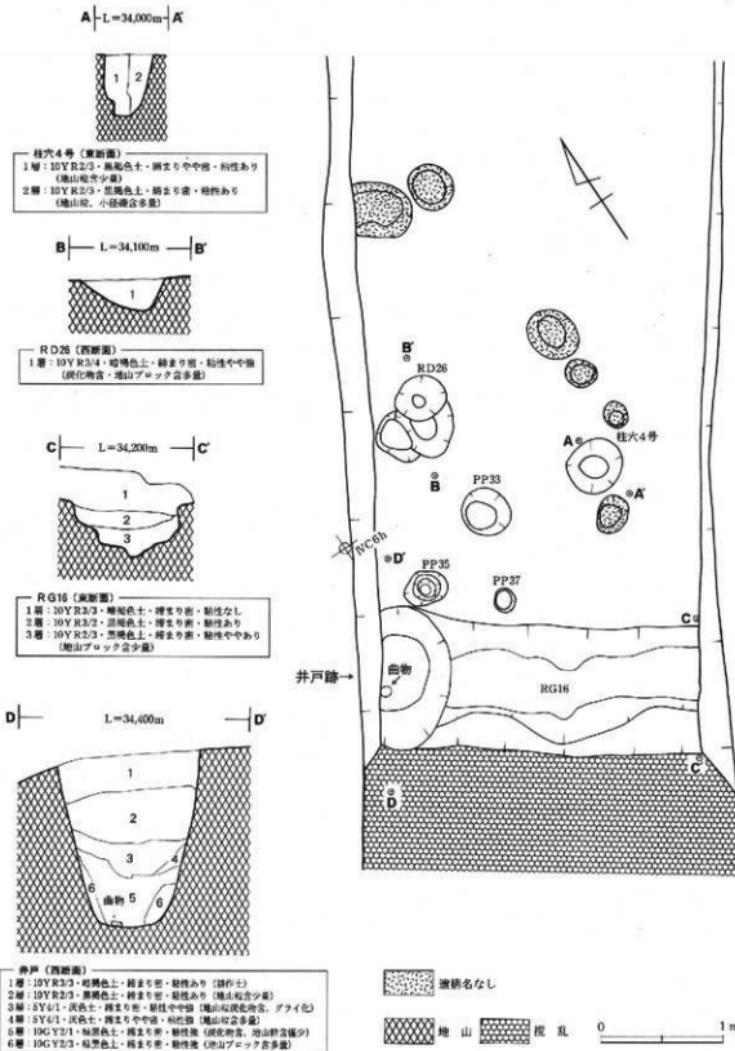
これらの状況等から、井戸跡の時期は明確に特定することはできないものの、近隣地域のはば同時代の遺跡である2箇所から、同様なワッパ片がしていることや、周辺の土坑や埋土等に於ける遺物出土状況等からも鑑みて、平安時代に造られたものと推定している。

底部は小礫を若干含んだ硬い層になっており、隣接する水田跡からのおびただしい湧水等もあって、より深い位置の精査は断念した。

#### (5) 柱穴（4基）・柱穴状土坑（86基）

調査区中央東側、及び調査区中央部で、土坑と合わせて顕著に分布している。柱穴1~4号は、その規模や、底部に見られた敷石等から柱穴と判断し登録した。これらは、全て調査区中央東側に集中しており、他の柱穴状土坑との関連も考慮に含めて調査したが、掘立柱建物跡を形成するような対応関係は見られなかつた。また、他に検出された大小それぞれの柱穴状土坑についても、上記と同様に対応関係を確認することはできなかつた。

出土遺物はP P 33から、内面に黒色処理が施された土師器の壺の一部 (No69) と、常滑窯の壺の一部 (No90) と思われるものがそれぞれ見つかっているのみで、他の柱穴・柱穴状土坑から遺物は出土していない。

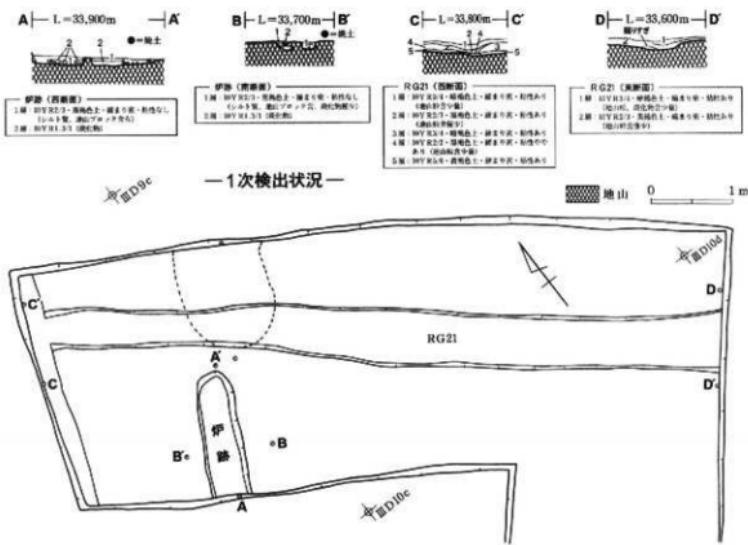


第28図 RG16・井戸跡・土坑・柱穴(平面図及び断面図)

第2表 柱穴・柱穴状土坑一覧

(柱 穴)			No.	径 cm	深さ cm	No.	径 cm	深さ cm	No.	径 cm	深さ cm
No.	径 cm	深さ cm	22	41.5×35.5	17.2	48	27.0×26.0	12.0	74	26.5×22.5	30.0
1	49.5×46.0	38.2	23	31.0×21.5	31.0	49	20.0×19.0	6.5	75	40.0×37.5	30.0
2	47.5×46.0	20.5	24	39.5×27.5	27.0	50	28.5×27.5	16.8	76	35.0×25.0	22.0
3	39.0×38.5	54.4	25	40.5×30.5	20.3	51	28.0×20.5	7.6	77	29.0×25.5	19.0
4	46.5×45.0	51.5	26	50.5×44.5	25.5	52	25.0×21.5	12.4	78	24.0×23.0	19.0
(柱穴状土坑)			27	30.5×24.0	33.6	53	27.5×27.0	16.2	79	36.0×32.5	36.2
No.	径 cm	深さ cm	28	34.0×22.0	24.8	54	34.5×21.0	19.0	80	25.0×21.0	24.0
5	36.0×34.0	23.5	29	32.5×24.5	18.9	55	34.5×26.5	23.7	81	44.0×34.0	16.0
6	36.5×28.0	23.0	30	32.5×32.5	26.5	56	25.0×25.0	7.6	82	19.5×18.5	28.0
7	60.5×47.0	25.0	31	28.0×22.0	31.8	57	28.0×27.0	21.6	83	28.0×22.5	17.1
8	31.0×24.0	40.0	32	44.5×26.5	21.3	60	30.5×25.0	41.0	84	21.5×19.5	14.0
9	28.0×25.5	24.0	33	41.0×38.5	20.5	61	25.5×24.0	42.0	85	25.0×24.0	12.0
10	41.5×39.5	46.0	34	27.0×20.5	25.5	62	36.0×32.5	21.0	86	35.0×33.0	22.0
11	20.5×20.5	21.0	35	36.5×27.5	23.5	63	17.0×25.5	25.0	87	27.0×24.0	19.0
12	39.0×29.5	29.2	36	35.5×30.5	22.2	64	24.0×20.0	20.0	88	20.0×17.0	10.3
13	45.5×37.5	22.3	37	20.0×17.5	35.0	65	26.5×21.5	27.0	89	26.0×23.5	33.5
14	19.0×17.0	23.2	39	25.5×21.0	31.5	66	30.0×29.0	26.5	90	58.0×50.0	20.0
15	30.5×25.0	37.4	41	23.5×21.5	8.4	67	33.0×27.0	18.0	91	35.0×30.0	28.0
16	41.0×32.5	18.6	42	30.0×26.5	23.8	68	23.0×27.5	9.0	92	59.0×54.0	36.0
17	53.5×38.0	41.4	43	23.0×22.0	31.5	69	30.5×29.0	17.0	93	25.0×24.0	20.0
18	34.0×25.5	19.1	44	24.0×21.0	24.4	70	34.0×23.5	27.0	94	28.0×25.0	17.0
19	35.0×28.0	22.0	45	28.5×14.0	22.0	71	26.0×25.5	14.0			
20	35.0×28.0	22.6	46	32.5×28.0	12.8	72	31.5×24.5	25.8			
21	28.0×24.5	20.2	47	36.0×17.5	15.1	73	29.0×26.0	35.0			

\*柱穴状土坑のNo.1から4・38・40・58・59は、規格等から再検討した結果、登録から除外した。



第30図 炉跡・RG21（平面図及び断面図）

#### (7) 鋼冶炉または製鉄跡と推定される炉跡遺構

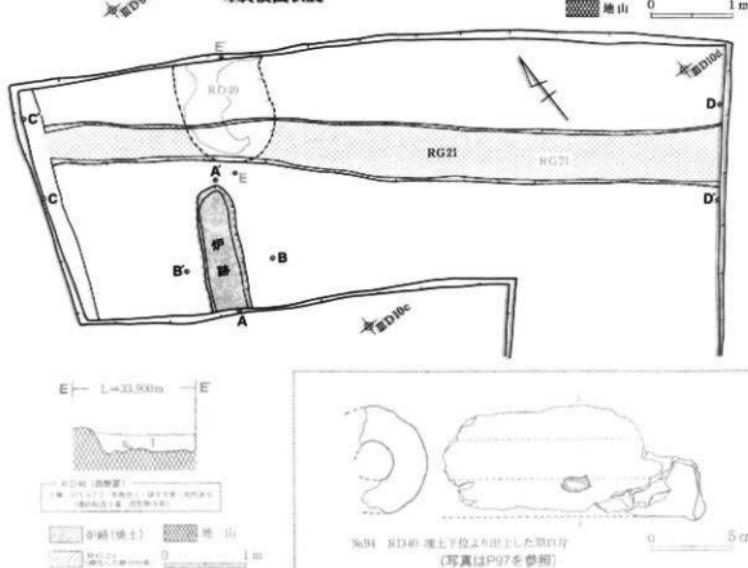
調査区北東部のⅢ D 9 b グリッド～Ⅲ D 9 c グリッドに、鋳冶炉または製鉄の跡と推定される遺構が検出された。特に、Ⅲ D 9 b グリッドの南側壁面から、北側に長軸1.4m・短軸0.45m・深さ0.1～0.25mの舌状に伸びる、焼土と炭化物を多量に含んだ跡跡しき遺構が明瞭に現れた。炭化物の鑑定結果によると、使用材は「ナラ科」であり、木炭として利用されたものと考えられるとのことである。また、0.2m北側に存在する RD 40 の埋土下位からは、一部ガラス化した羽口片が出土している。

この跡跡の北側に位置し、東西方向へ伸びる RG 21 では、他の構跡の埋土とは明らかに性格を異にする鉄鉱滓もしくは鉄分の塊らしきものが、帯状に分布しているのが確認できたことから、周辺部の土壤と併せてサンプルとして採取し、これを目の網かハフライにかけ、鍛冶が跡で見られるような鍛造断片及び、鉄鉱滓の有無等を調べたが、確認することはできなかった。

その一方で、ハフライにかけた中に、磁石にも反応しない赤褐色の塊が残ったことから、より専門的に分析を行うため、岩手県工業技術センター金属材料部のご協力を得て、残存物質を蛍光X線分析にかける調査をお願いした。その結果、かなりの量で酸化した鉄分が含まれていることがわかり、同様な塊が跡跡内からも探査 A | L=33.900m と 採集 A 互いに B | E=33.700m と B' であった C | L=33.800m と C' いうことが D | L=33.800m と D' したが、この塊の変化・酸化が予想以上に進んでいたことから、跡跡の詳細な調査は不可能である。



一 次 検 出 状 況



第31図 第30回R 炉跡 (RG 21) (平面図及び断面図) 実測図

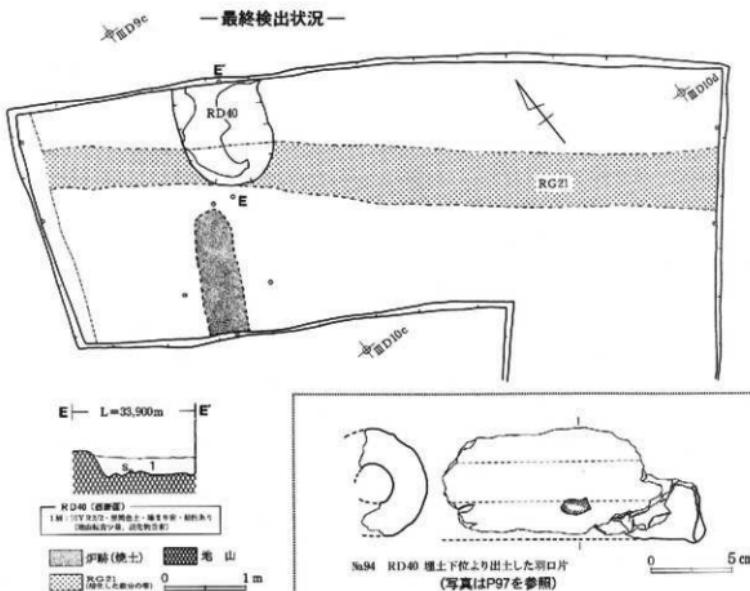
#### (7) 鋼冶炉または製鉄跡と推定される炉跡遺構

調査区北東部のⅢD 9 b グリッド～ⅢD 9 c グリッドに、鋳冶炉または製鉄の跡と推定される遺構が検出された。特に、ⅢD 9 b グリッドの南側壁面から、北側に長軸1.4m・短軸0.45m・深さ0.1～0.25mの舌状に伸びる、焼土と炭化物を多量に含んだ炉跡らしき遺構が明瞭に現れた。炭化物の鑑定結果によると、使用材は「ナラ科」であり、木炭として利用されたものと考えられるとのことである。また、0.2m北側に存在するRD 40の埋土下位からは、一部ガラス化した羽口片が出土している。

この炉跡の北側に位置し、東西方向へ伸びるRG 21では、他の溝跡の埋土とは明らかに性格を異なる鉄鉱滓もしくは鉄分の塊らしきものが、帯状に分布しているのが確認できたことから、周辺部の土壤と併せてサンプルとして採取し、これを目の細かいフルイにかけ、鋳冶炉跡で見られるような鍛造剣片及び、鉄鉱滓の有無等を調べたが、確認することはできなかった。

その一方で、フルイにかけた中に、磁石にも反応しない赤褐色の塊が残ったことから、より専門的に分析を行うため、岩手県工業技術センター金属材料部のご協力を得て、残存物質を蛍光X線分析にかける調査をお願いした。その結果、かなりの量で酸化した鉄分が含まれていることがわかり、同様な塊が炉跡内からも採取されていることから、互いに関連する遺構であったのではないかということが調査結果より判明したが、この塊の酸化・風化が予想以上に激しく、原形の詳細については突き詰めて明らかにすることは不可能であった。

炉跡に関連する出土遺物はこれらの他には見られず、遺構の時代は不明である。



第31図 炉跡・RD 40(平面図・断面図及び出土遺物実測図)

## V まとめ

### 1. 調査全般について

当該遺跡は、担い手育成基盤整備事業に付随する、寿安中堰水系整備とも関連した用・排水路部分の工事に伴う遺跡の発掘調査である。耕作地部分は盛土を行うため、調査対象からは外されており、比較的深い部分まで掘り下げて建設する用・排水路部分の、ごく狭く細長い限られた調査範囲となっている。

検出された遺構の分布状況を見てみると、調査区北東部にあたる II C・II D～IV C・IV Dの大グリッドで囲まれた部分に溝跡、土坑及び柱穴状土坑群が集中しており、炉跡や井戸跡、陥し穴等も併せて検出されたが、堅穴住居跡らしい痕跡は見当たらない。これは元来、この付近に堅穴住居跡が全く存在しなかつたのではなく、調査区がごく狭い範囲に限定されていることが、その理由のひとつとして挙げられる。

一方、調査区南側の V A～VI Bの大グリッドに於いて堅穴住居跡が集中して検出されており、この集中地域には、分布状況とほぼ合致するように標高35mの等高線が走っていることが、地形図から確認することができる。土坑・柱穴状土坑群が見られる前述の調査区北東部は、他の地点と比較して約1～2m程度標高が低く、当該地域一帯が胆沢扇状地の扇端部分及び、北上川の氾濫原とほぼ重複する地域でもあることから、自然災害等から避けて微高地に生活拠点を求めたことの現れであることとも、集中して検出された要因の一つとして考えられる。これら堅穴住居跡は遺物等から、平安時代（9C後半～10C前半頃）のものと推測している。

建設省国土地理院が発行する5万分の1地形図を開くと、胆沢平野一帯にいくつか同様な「水」が付された地名を見つけることができ、近隣の水沢市南端にも、当該遺跡と同じ「水ノ口」の地名がある。これらは胆沢扇状地の扇端部分に分布していることが多く、同様な歴史をもつていていることも推察できる。

調査区全般を含め、周辺一帯は水田が広がっており、今回の圃場整備事業が着手される以前の状況は、既に整然と区画された水田耕作地となっていた。これは、昭和30年代初頭から実施された、一世代前の圃場整備事業によるものであるが、当時としては大規模に行われた事業であったと思われ、調査区の至るところで擾乱を受けた部分（特に調査区中央部）があり、今回の発掘調査でも検出作業に困難を極めた。

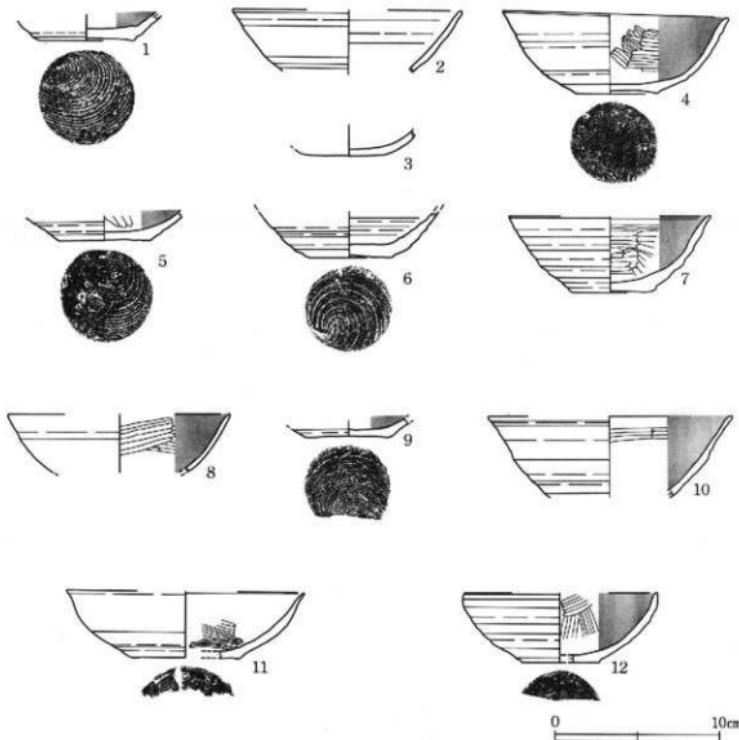
調査範囲が、幅2～3mの狭く細長いごく限られたものとなったが、調査区に囲まれた耕作地部分の様子も明らかにできれば、遺跡のより明確な全体の姿を掴めることだろう。

### 2. 出土遺物について

土師器・須恵器が大勢を占めているが、完形品に近いものは、堅穴住居跡に付隨していた坏のみで、大半は小片から成り、磨滅していたものも多かった。陶磁器関係では、皿の一部と思われる8～9世紀頃に造られた線釉陶器片（産地は不明：No.89）や、壺と思われる12～13世紀頃の常滑産陶器片（No.90）、室町時代末頃のものと推定される唐津産灰釉陶器片（No.93）など、平安時代から近世及び近代にかけて、はるか離れた遠方の地と当該地域との、長年に渡る交易の様子や生活の痕跡を、遺跡は如実に伝えている。

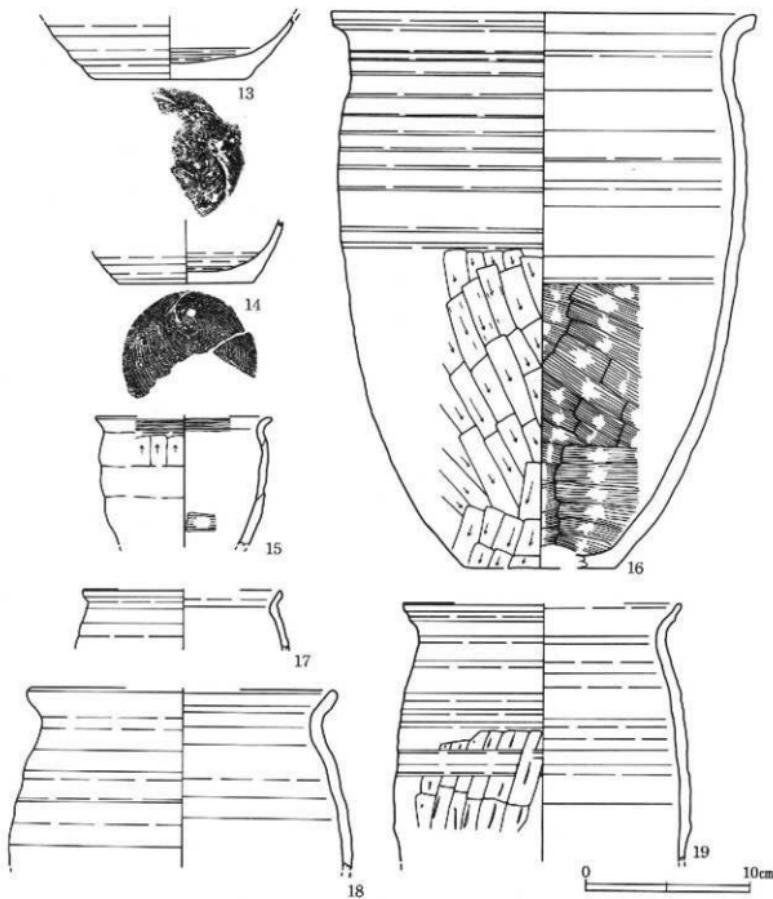
#### <参考文献>

- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第248集 1997 「白井坂I・II遺跡発掘調査報告書」  
同 上 第249・250集 1996・1997 「山ノ内II・III遺跡発掘調査報告書」  
同 上 第272・298集 1998・1999 「北野IV遺跡発掘調査報告書」  
岩手県前沢町文化財調査報告書第6集 1998 「町内遺跡詳細分布調査報告書I」  
渡辺 光 1975 「新版 河川学」（古今書院）  
窪田 蔵郎 1983 「製鉄遺跡」（ニュー・サイエンス社）  
潮見 浩 1988 「図解 技術の考古学」（有斐閣）



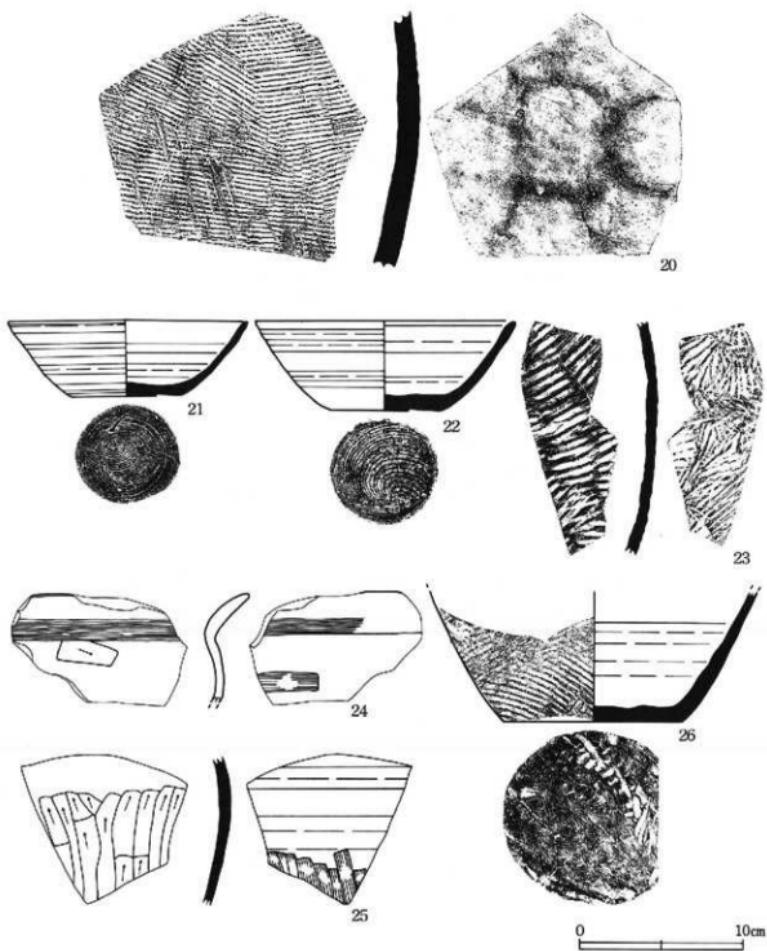
番号	出土地点	層位	器種	種類	外面施錠	内面施錠	口径cm	底径cm	高さcm	特徴
1	RA 1	カマド 燃焼跡	坪	土器	クロ	クロ	6.0	(1.6)	圓錐形切り、内面にすが付着。	
2	"	"	土器?	"	"	(14.0)			(3.8)	原底高士器の可能性あり。9C末~10C代。
3	"	"	土器?	"	—		(5.2)	(1.2)	底部は斜面削り後、ケズリ。断続している。	
4	"	カマド 石臼	坪	"	"	モガ命	13.8	5.6	4.9	底部下部にケズリ。底部に圓錐形切りの後、ケズリ。
5	"	床面	"	"	"	"	5.6	(1.8)		底部下部にケズリ。底部に圓錐形切りの後、ケズリ。
6	"	R D 4. 埋土中位	土器?	"	クロ		(5.2)	(2.7)	底部は斜面削りの様。	
7	"	"	土器	"	モガ命	(12.3)	(5.2)	(4.2)	"	
8	"	R D 3. 埋土中位	"	"	"	"	(13.6)	(3.6)		モガ命が鮮明。
9	"	埋土中位	"	"	"	"	(5.2)	(1.2)		底部は斜面削り底。外縁・底縁にすが付着。
10	"	焼土	"	"	"	"	(15.0)	(6.0)		口縁部外縁にすが付着。口径は大きい。
11	"	埋土上位	"	"	"	"	(15.5)	(6.6)	3.7	底縁に斜面削り底。断続が激しい。
12	"	ベルト上位	"	"	"	"	(11.8)	(4.7)	4.5	底縁は斜面削り後、ケズリ。

第32図 RA 1 出土遺物 (1)



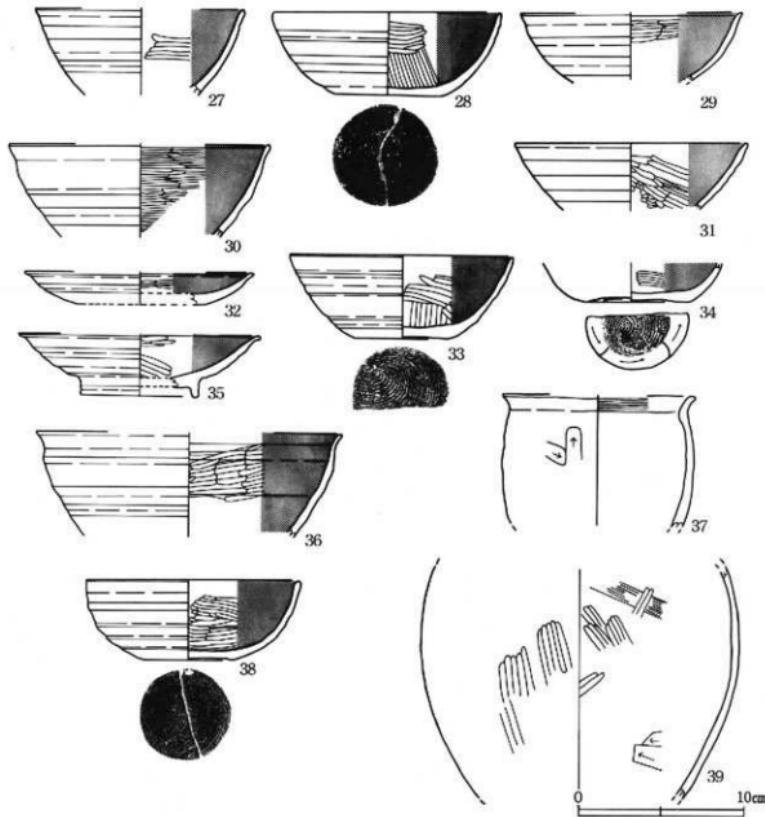
番号	出土地点	層位	器種	種類	表面調査	内面調査	口径cm	底径cm	高さcm	特　　徴
13	RA 1 方マド 縦隔壁	又山跡?	土器?	ロクロ	ロクロ・ナゲ		(9.0)	(3.9)		底部は圓柱形切り後、ケズリ。胎土は赤い。
14	*	床面	甕?	*	*	ロクロ		(8.2)	(3.8)	底部に凹凸形切り痕。底出筋無し?
15	*	R D 1 堆土下部	甕	上部	ミコチ・ケヅリ	ミコチ・ナゲ	(10.0)		(7.9)	内外面にすりが付着。ナゲ・ケズリは不斷面。
16	*	R D 4 堆土中段	*	*	ミコチ・ケヅリ	ミコチ・ナゲ	26.0	9.3	34.2	
17	*	*	*	*	ロクロ	ロクロ	(12.0)		(3.7)	
18	*	又山跡 横隔壁	甕?	*	*		(19.0)		(11.0)	11 Cを考慮される。
19	*	*	土器	ロクロ・ケヅリ	ロクロ・ナゲ	(17.0)		(15.8)	*	

第33図 RA 1 出土遺物 (2)



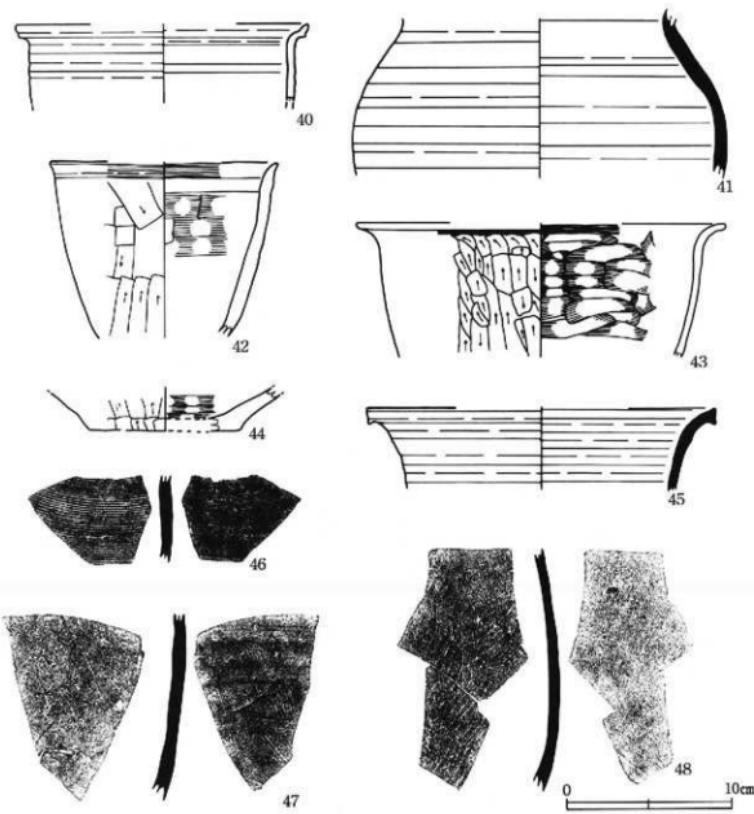
番号	出土地點	層位	胎種	表面	外周調節	内周調節	口径cm	底径cm	高さcm	特徴
20	RA 1	床面	變?直?	無	タタキ	あて重			15.8	
21	RA 2	埴土下位	35	#	ロクロ	ロクロ	14.7	6.4	4.7	体部下部にケズリ。底部は圓板系切り版、ケズリ。
22	#	#	#	#	#	#	15.9	6.6	5.5	底部に圓板系切り版。
23	#	埴土下位	變?直?	#	タタキ	タタキ			14.2	
24	#	埴土下位	直	土師	ヨコザ・ケズリ	ヨコザ・ナヅ			(7.0)	邊縁が壘しい。
25	#	#	直?	無	ロクロ・タタキ	ロクロ・ナヅ			(9.3)	腹?の輪郭か?
26	#	#	變?直?	#	ロクロ・タタキ	ロクロ			(11.0) (8.0)	底部内面にあて重。底部にケズリ。

第34図 RA 1・2 出土遺物



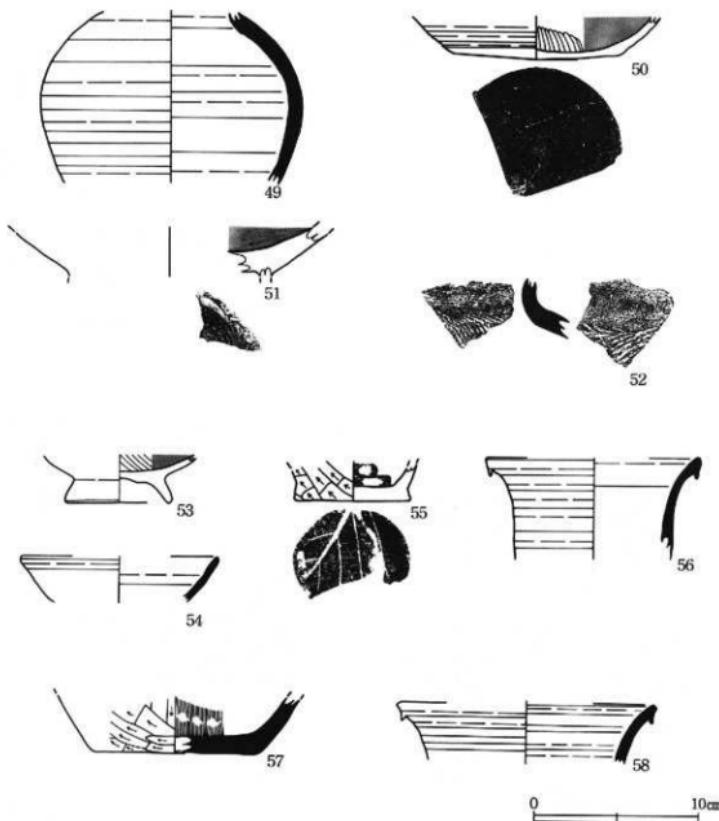
番号	出土 地点	層 位	器 様	種 類	外 観 図	内 部 施 工	口 径 cm	底径 cm	高さ cm	特 性
27	R A 3	床 面	壺	土器	ロク	ミガキ	(12.7)	(5.3)	口径が大きい。	
28	*	R D 3 下位	*	*	*	*	13.9	6.3	5.1	底部下端にケズリ。底部は回転糸切り後、ケズリ。
29	*	ベルト 下位	*	*	*	*	(13.5)	(4.1)		
30	*	*	*	*	*	*	(16.0)	(5.7)	口縁部外面にすすぐ付骨。口縁部の縁が大きい。	
31	*	*	*	*	*	*	(14.2)	(4.1)		
32	*	壁上中位	*	*	*	*	(14.0)	(8.2)	(2.0)	口縁部～底部が残る。
33	*	R D 1 壁上中位	*	*	*	*	13.8	6.9	5.1	口部下端にケズリ。底部は回転糸切り後、ケズリ。
34	*	R D 5 壁上中位	*	*	*	*		(8.3)	(2.4)	移動下端にケズリ。底部は回転糸切り後、ケズリ。
35	*	R D 4 壁上中位	*	*	*	*	(14.0)	7.2	(3.8)	高台張り付け跡ある。9 C末～10 C代。
36	*	ベルト 上位	*	*	*	*	(18.7)	(6.4)		
27	*	床 面	壺	土器	ミコナデ・ケズリ	ミコナデ・ナゲ	(11.5)	(5.7)		施錆か。内部裏にすすぐ付骨。 アラタ。ナゲは不規則。9 C末～10 C代。
38	*	P P 3	*	*	*	*	13.8	5.5	4.9	底部下端にケズリ。底部は回転糸切り後、ケズリ。
39	*	壁上下位	*	*	ミコナデ・ケズリ	ミコナデ・ナゲ			(14.4)	

第35図 R A 3 出土遺物 (1)



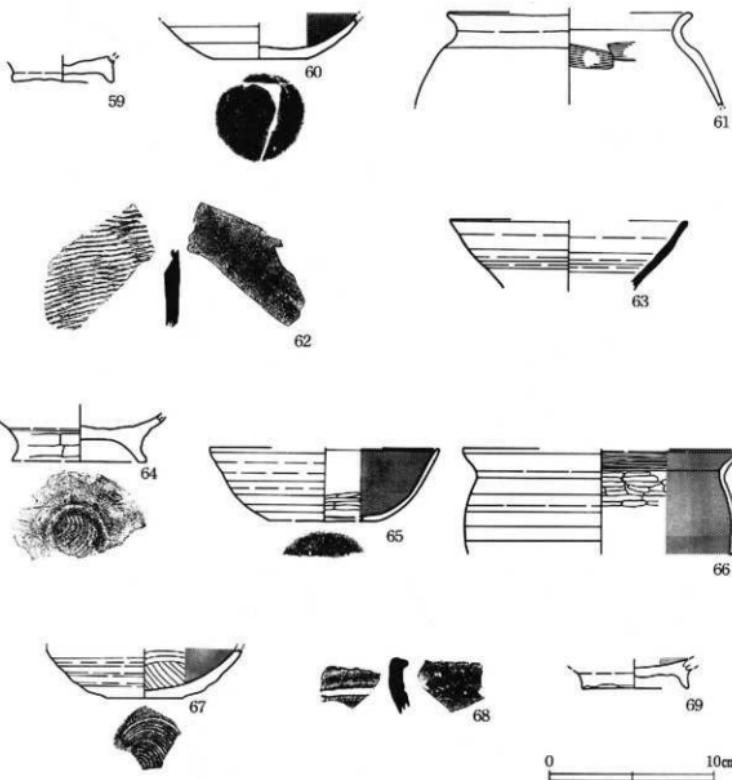
番号	出土地点	層位	器種	種類	外面特徴	内面特徴	口径cm	底径cm	高さcm	特徴	
40	RA 3	地表下位	器	土器	ロクロ	ロクロ	(17.6)		(4.8)	瘤頭している。	
41	x	ベルト上位	x	漆器	x	x			(9.7)	質部か?	
42	x	x	土師	ナガニコロナゲ	ナガニコロナゲ	(14.0)			(10.8)	内面にすすが付着。	
43	x	地表下位	x	x	ミコナゲ・ナゲ	ミコナゲ・ナゲ	(22.6)		(9.2)		
44	x	ベルト下位	器?	x	ケズリ	ナゲ			(9.2)	(2.3)	外面上にすすが付着。
45	x	地表下位	漆?器?	漆器	ロクロ	ロクロ	(21.4)		(5.1)	9 C末~10 C代。	
46	x	地表下位	x	x	x	x			(5.3)		
47	x	RD 1 地表下位	x	x	タタキ・ケズリ	タタキ・ナゲ			(11.4)		
48	x	x	x	x	タタキ・ケズリ	x			(14.8)		

第36図 RA 3 出土遺物 (2)



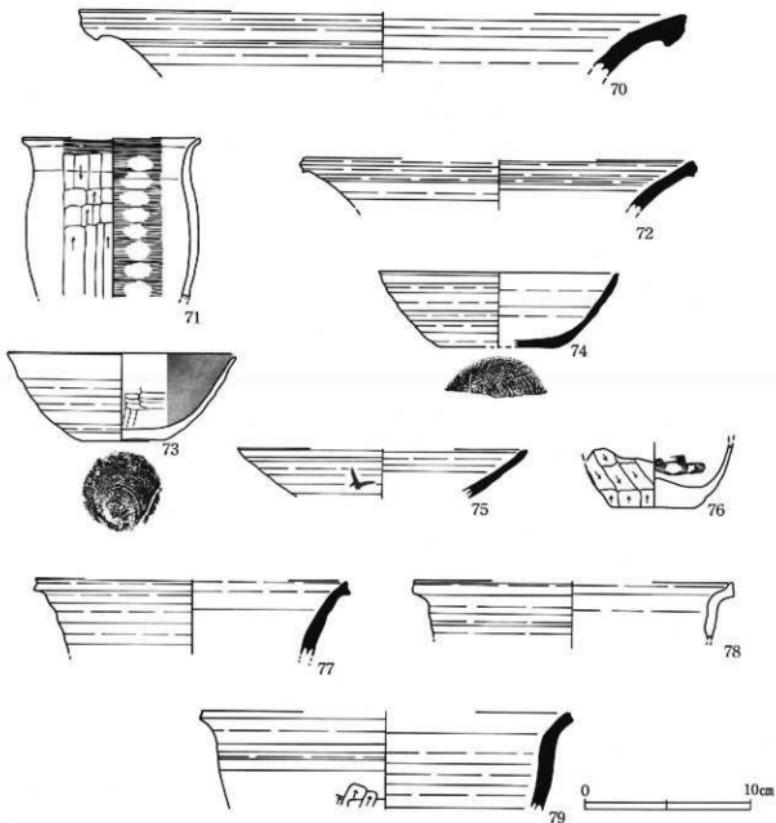
番号	出土地点	層位	形態	種類	外表面模様	内面調査	口径cm	底径cm	高さcm	特徴
49	RA 3	床面	長楕円?	須恵器?	無	ロクロ	ロクロ			
50	*	壁上位	鉢?	土師	*	ミダリ	(10.1)	(2.7)		外側下端にケズリ。底面は回転糸切り後、ケズリ。外側・裏面にすすぐ付着。
51	*	堆土上位	不明	不明	黒色処理?	黒色処理?	(12.4)	(3.1)		外側・底部も黒色処理か? 高台跡あり。
52	RA 4	埋土下位	壺	須恵	ロクロ・タテキ	ロクロ・タテキ			(4.3)	
53	RA 7	堆土中位	壺	土師	ロクロ	ミダリ		7.0	(3.0)	高台あり。(底にすすぐ付着)。内面黑色処理。縫隙している。
54	*	*	*	灰陶	*	ロクロ	(12.0)		(2.0)	
55	*	*	*	甕	土師	ケズリ		7.1	(2.6)	底面に木炭痕。唐破が著しい。
56	*	*	*	須恵	ロクロ	ロクロ	(13.1)		(6.3)	
57	*	堆土上位	*	*	ケズリ	ナダ			(10.2)	(3.4) 底面内面にあて痕。底面にケズリ。
58	*	*	壺?	*	ロクロ	ロクロ	(15.0)		(3.6)	9 C末~10 C代。

第37図 RA 3・4・7 出土遺物



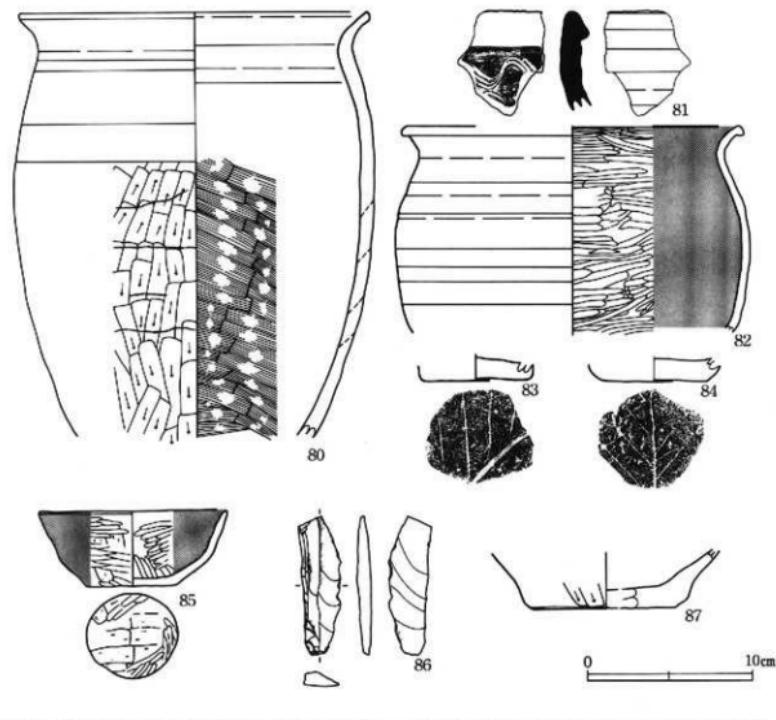
番号	出土地点	層位	器種	種類	外沿網目	内面網目	口径cm	底径cm	高さcm	特徴
59	RD 3	堆土上位	不	土師	ロクロ?	ミガキ	6.2	(1.6)	内面に黒色処理。高台あり、麻縫が古しい。	
60	"	"	不	土師	ロクロ?	ミガキ	5.8	(2.7)	磨滅しており、底部は不明瞭。	
61	"	基壇	甕	ロクロ?	ナデ	(34.4)			(3.5)	
62	RD 4	堆土下位	度?	須志	クタキ	ナデ?			(4.6)	
63	RD 6	堆土上位	不	ロクロ	ロクロ	(34.4)			(4.3)	
64	RD 10	?"	土師	土師	ロクロ	ミガキ	(3.2)	(2.6)	高台あり。磨滅しており、ケズリ方向は不明瞭。	
65	RD 14	?"	甕	土師	ロクロ?	ミガキ	(34.0)	(6.6)	4.5	磨滅している。底部下縁にケズリ?
66	"	堆土下位	甕	土師	ロクロ・コナフ	(36.9)			(8.5)	口縁・内面に火を受けたのでは?
67	RD 12	堆土上位	不	土師	ミガキ	ミガキ	(4.8)	(3.1)	(3.1)	底部に凹凸があり底、削落している。 内面に黒色処理。磨滅している。
68	井戸跡	堆土中位	甕?	須志	ナデ・共蓋ナデ	ナデ			(3.8)	
69	PP 23	"	甕	土師	ロクロ	ミガキ	6.5	(1.8)	内面に黒色処理。高台あり。磨滅している。	

第38図 RD 3～PP 33 出土遺物



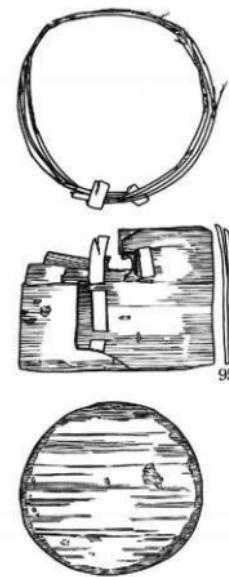
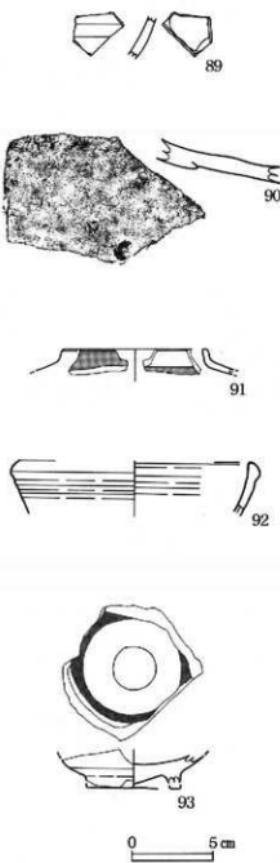
番号	出土地点	層位	器種	粗細	外面調査	内面調査	口径cm	底径cm	高さcm	特徴
70	R G 16	埋土上位	甕?	領芯	ロクロ	ロクロ	(37.2)		(3.8)	
71	*	埋土上位	甕?	土師	ヨコナギ・タガ	ヨコナギ・タガ	(10.0)		(9.8)	
72	*	埋土上位	甕?壺?	領芯	ロクロ	ロクロ	(23.0)		(3.0)	
73	R G 17	#	壺	上師	#	ミガキ	(14.6)	5.0	5.4	底部に凹痕あり。磨滅している。 部分焼けた可燃性あり。
74	#	埋土中位	#	領芯	#	ロクロ	(14.7)	(7.0)	4.5	底部は凹痕あり。追光焼成
75	#	埋土上位	#	#	#	#	(18.0)		(3.0)	内面に墨書きしき跡がある。
76	#	#	壺	土師	ケズリ	ナヂ	5.2	(4.0)	内面にあて痕。追光焼成。磨滅している。	
77	#	#	甕?壺?	風窓	ミクロ	ロクロ	(19.1)		(4.6)	9℃末~10℃代。
78	#	#	甕	土師	#	#	(19.0)		(3.5)	剥離している部分がある。
79	R G 20	埋土中位	甕	須裏	ロフニ・ケズリ	#	(11.5)		(5.9)	

第39図 R G 16・17・20 出土遺物



番号	出土地点	層位	形種	性質	外表面特徴	内面特徴	口径cm	底径cm	高さcm	特徴
80	V A 7 b	地山面	壺	土器			(31.2)		(26.2)	ロクロ底形。
81	IV C 10 a	*	*	須志	ロクロ	ロクロ			(5.9)	内面に繊維波状文。
82	VIA 7 b	*	*	土器	*	ミガキ	(31.2)		(13.3)	ロ槽周縁にすが付着。9 C ~ 10 C。
83	V C 1 a	II 層	壺?	*					(6.6) (1.2)	底部に木炭痕、焼結が苦しい。
84	*	*	*	*					(6.0) (1.3)	底部に木炭痕、焼結している。
85	VIB 1 g	地山面	壺	*	ケズリ、ちぎれ	ミガキ	11.6	5.7	4.6	内外面黒色化現象、火を受け汚損痕消滅している。
86	III C 8 b	*	フレイク	石器						石器破片、ナイフ型?
87	V A 10 f	II 層	壺?	土器	ケズリ		(8.7)	(3.5)		底部に木炭痕、焼結が苦しい。
88	VIB 3 e	*	*	須志			(55.0)	(30.0)		深元輪廻成。

第40図 遺構外出土遺物



番号	出土地点	層位	器種	既報	外周調整	内部調整	口径cm	直徑cm	高さcm	特 許
89	R D 42	埋土中位	皿?	陶器						縦割内面。8C~9C頃で、產地は不明。
90	P P 33	埋土上位	甕?	x						12C~13C頃。常滑窯。
91	R G 7	埋土下位	土瓶	x						壺入りあり。19C頃。大瀬細窯。
92	R G 15	x	片口?	x			(14.0)		(3.3)	19C頃。在地底。
93	浜跡北端	埋土中位	甌	x				6.0	(2.4)	灰陶海器。室町時代末頃。唐津窯。
95	芦戸跡	武部	曲物	木製品			12.0	11.1	8.5	蓋部「ヒノキ溝」、止め具「マツ溝」。底部「スギ」。

※ No.64 羽口片(土製品)は、図版31を参照

第41図 造構内出土遺物(陶磁器・木製品)

VI 水ノ口遺跡出土材樹種同定  
報告書

## 前沢町「水ノ口遺跡」出土材の樹種

高橋 利彦（木工舎「ゆい」）

### 1. 試 料

試料は、平安時代のものとされる井戸跡から出土した「曲物」と同「底板」および「加工材」の計3点である。「曲物」は井戸の底部（深さ約1.5m）から、「加工材」は覆土の中位（深さ約1m）から出土している。作業の便宜のため、「曲物」側板をNo.1、同「底板」をNo.2、「加工材」をNo.3とした。（表1参照）

### 2. 方 法

「曲物」は出土後、乾燥状態で保管されていたため、採取した材片を水で煮て軟化・膨張させたのち、剃刀の刃を用いて試料の木口・柾目・板目の3面の徒手切片を作製、ガム・クロラール（Gum Chloral）で封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に顕微鏡写真図版（図版1）も作製した。なお、作製したプレパラートは全て木工舎「ゆい」に保管されている。

### 3. 結 果

試料は以下の3 Taxa（分類群：ここでは属・亜属・種の異なる階級の分類単位を総称している）に同定された。試料の主な解剖学的特徴や、現生種の一般的な性質は次のようなものである。なお、各Taxonの科名・学名・和名およびその配列は「日本の野生植物 木本I・II」（佐竹ほか 1989）に従い、一般的な性質などについては「木の事典 第1巻～第17巻」（平井 1979～1982）も参考にした。

#### ◎マツ属複維管束亜属の一種 (*Pinus* subgen. *Diploxyylon* sp.) マツ科 No.3

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は広く、年輪界は明瞭である。樹脂細胞はなく樹脂道が認められる。放射組織は仮道管、柔細胞とエビセリウム細胞よりなる。仮道管内壁には、隔壁状の突出が認められるが、劣化により消失しているものが多い。分野壁孔は窓状である。放射組織は単列で、1～15細胞のものと、樹脂道をもつ筋錐形のものがある。

複維管束亜属（いわゆる二葉松類）には、クロマツ (*Pinus thunbergii*)・アカマツ (*P. densiflora*) と琉球列島特産のリュウキュウマツ (*P. luchuensis*) の3種がある。アカマツは北海道南部から九州に、クロマツは本州から琉球に分布するが、暖地の海沿いに多く生育した、古くから砂防林として植栽されてきた。材は重硬で強度が大きく、保存性は中程度であるが耐水性に優れる。建築・土木・建具・器具・家具材など広い用途が知られている。

#### ◎スギ (*Cryptomeria japonica*) スギ科 No.2

早材部から晩材部への移行はやや急で、年輪界は明瞭である。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管ではなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はスギ型 (Taxodioid) で2～4個ある。放射組織は単列で、1～20細胞高が見られる。

スギは本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では、現在ヒノキに次ぐ植林面積を持ち、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。

◎ヒノキ属の一種 (*Chamaecyparis* sp.) ヒノキ科 №1

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭である。樹脂細胞は晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型 (*Cupressoid*) で1~4個持つ。放射組織は単列で、1~15の細胞高がある。

ヒノキ属にはヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) とサワラ (*C. pisifera*) の2種がある。ヒノキは本州 (福島県以南)・四国・九州に分布し、また各地で植栽される常緑高木で、国内では現在、植林面積第1位の重要樹種である。材はやや軽軟で加工は容易、割裂性は大きいが強度・保存性は高い。建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州 (岩手県以南)・九州に自生し、また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが、耐水性が高いため橋や桶にするほか、各種の用途がある。

以上の同定結果を一覧表で示す。(表1)

表1 「水ノ口遺跡」出土材の樹種

試料番号	用 途	種 名
1	曲物側板	ヒノキ属の一種
2	同上底板	スギ
3	加 工 材	マツ属複維管束至属の一種

#### 4. 考 察

「曲物」は、側板がヒノキ属、底板がスギ製であった。現代に近いほど植種や材料の専門化が進んでくるため、同じ針葉樹であっても異種材を組み合わせることはほとんど無いが、出土遺物ではこのような例はそれほど希有というわけではない。筆者が検討した平泉町志羅山遺跡第66次調査出土試料の中にも、側板がヒノキ属、底板がスギの組み合わせの例(注1)があった。また、同町泉屋遺跡第13次調査試料の中には、ヒノキ科の側板にクリの底板の組み合わせの例(注2)もある。広葉樹の底板を持つ例としては、福島市御山千軒遺跡の平安時代のものとされる出土曲物(ケヤキの底板に、ヒノキの側板の組み合わせ:鶴倉1983)もある。

試料に近い時代の類例は、江刺市落合Ⅱ遺跡(岩手県教育委員会1980)や、水沢市胆沢城跡(沢辺1977)の出土遺物の中にもあり、落合Ⅱ遺跡試料では底板にはマツとスギ、側板にはヒノキ(但し別資料)が、胆沢城跡試料では底板・側板の両者にスギが用いられていたと報告されている。なお江釣子村(現:北上市)下谷地B遺跡出土試料の中にもスギ製の曲物底板や側板が報告されているが、本文中では、ヒノキとされる側板が計測表中ではスギとされていて(岩手県教育委員会1982)、どちらが正しいのか不明である。

(注)

- (1) 既報の「志羅山遺跡第66次調査出土材樹種同定報告書」(木工舎「ゆい」1998)を参照のこと。  
(2) 同じく「泉屋遺跡第13次調査出土材樹種同定報告書」(木工舎「ゆい」1995)を参照のこと。

<引用文献>

- 平井 信二 1979~1982 「木の事典 第1巻~第17巻」かなえ書房  
岩手県教育委員会 1980 木製品「岩手県文化財調査報告書第50集 東北新幹線関係埋蔵文化財調査  
報告書-VI-」岩手県教育委員会・日本国有鉄道盛岡工事局  
289~312【樹種同定は(財)元興寺文化財研究所による】  
岩手県教育委員会 1982 植物遺体「岩手県文化財調査報告書第72集 東北縦貫自動車道関係埋蔵  
文化財調査報告書-XVII(北上地区)」岩手県教育委員会・日本道路公团  
187~197  
佐竹 義輔・原 寛 「日本の野生植物 木本 I・II」平凡社 321~305pp  
亘理 俊次・富成 忠夫(編) 1989  
沢辺 攻 1977 胆沢城跡出土の木製品の樹種識別「岩手県水沢市佐倉河 胆沢城跡  
-昭和51年度発掘調査概報-」水沢市教育委員会 85~90  
崎倉 巳三郎 1983 御山千軒遺跡から出土した木質遺物「福島県文化財調査報告書第109集  
東北新幹線関連遺跡発掘調査報告VI 御山千軒遺跡」  
福島県教育委員会・日本国有鉄道 付編 9~30

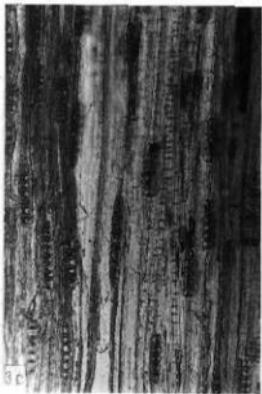
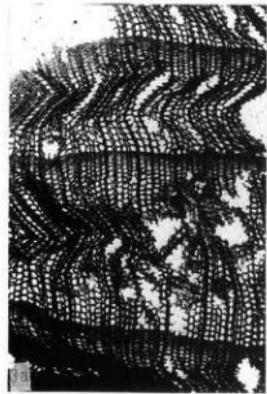
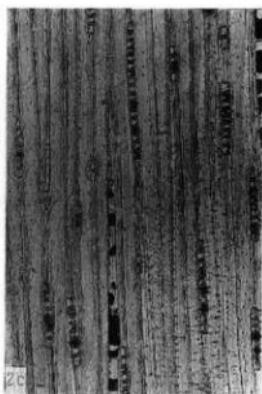
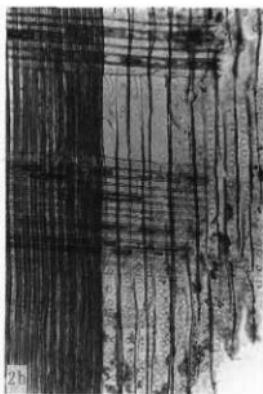
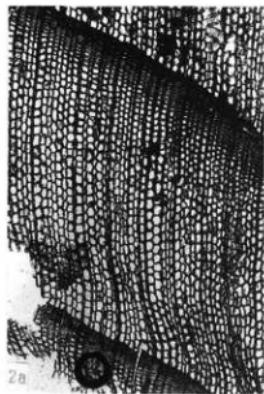
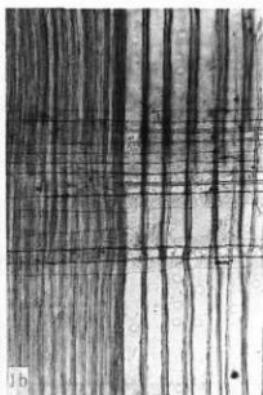
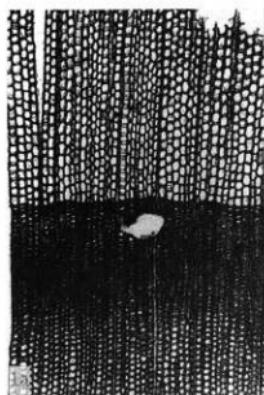
<図 版1> 1. マツ属複維管束亞属の一種 №3

2. スギ №2

3. ヒノキ属の一種 №1

a : 木 口 ( $\times 40$ ) b : 柄 目 ( $\times 100$ ) c : 板 目 ( $\times 100$ )

樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ、柾目では左から右。



# 写 真 図 版





水ノ口遺跡遠景（北方向：奥は北上川）



調査区全景

写真図版1 航空写真(1)



調査区上空（東方向）



調査区上空（北東方向）

写真図版2 航空写真(2)



器 内 面



器 外 面

写真図版3 出土遺物(陶磁器)



調査前風景（南端部）



調査前風景（西端部）



調査前風景（中央部）



調査前風景（東側）



作業風景（試掘）



作業風景（北端部の検出作業）



作業風景（北端部の検出作業）



作業風景（中央部の実測作業）



基本層序（炉跡付近）

写真図版4 調査前風景・作業風景・基本層序



RA1 平面 (東方向)



RA1 平面 (北方向)



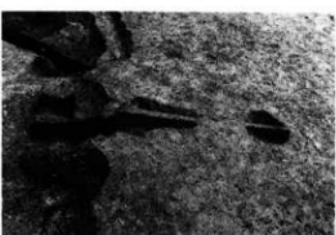
RA1 西断面



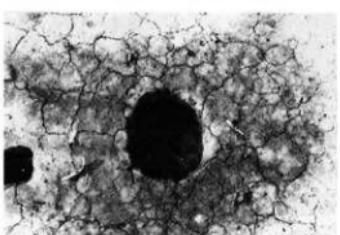
RA1 ベルト断面



RA1 かまど、煙道の状況



RA1 煙道 (断面)



RA1 煙出し (壳揚)



RA1 かまど (断面)

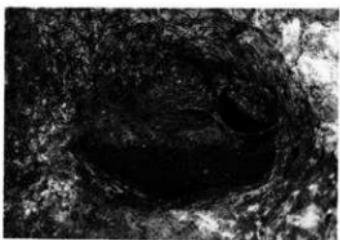
写真図版5 RA1 (遺構)



RA1 土師器出土（かまど付近）



RA1 土師器出土（かまど底部）



RA1 土師器出土（かまど付近）



RA1 須恵器出土（底部）



RA2 平面



RA2 ベルト断面

写真図版6 RA1（出土遺物）・RA2（平面及び断面）



RA3 平面 (完掘)



RA3 平面 (遺物出土時)



RA3 ベルト断面



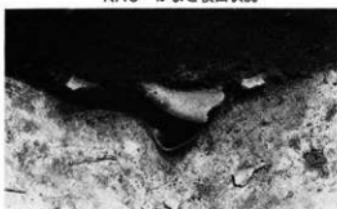
RA3 断面



RA3 かまど検出状況



RA3 かまど抽断面



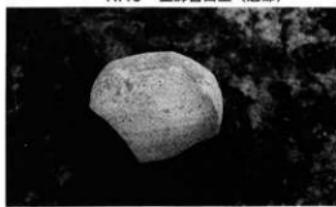
RA3 土師器出土 (底部)



RA3 土師器出土 (底部)



RA3 須恵器出土 (底部)



RA3 須恵器出土 (底部)

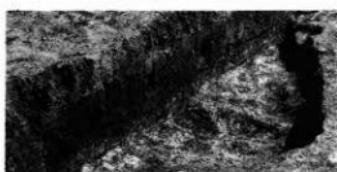
写真図版 7 RA3 (遺構及び出土遺物)



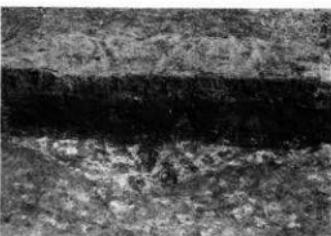
RA4 平面



RA4 ベルト断面



RA5 平面



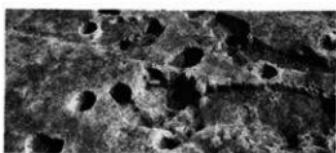
RA5 断面



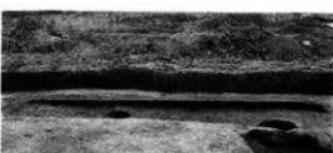
RA6 平面



RA6 断面



RA7 (住居状遺構) 平面



RA7 (住居状遺構) 断面

写真図版8 RA 4~7 (平面及び断面)



RD3 (平面)



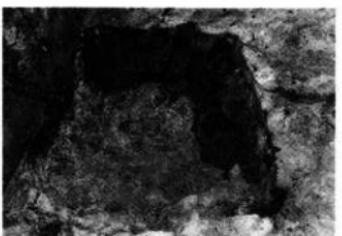
RD3 (断面)



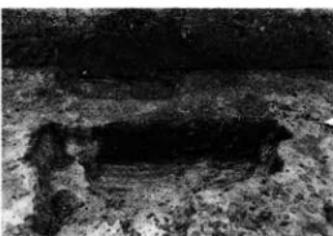
RD4・5 (平面)



RD4・5 (断面)



RD7 (平面)



RD7 (断面)



RD8 (断面)

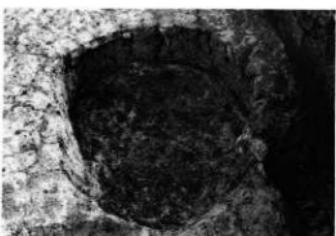
写真図版9 RD3～8 (平面及び断面)



RD10・27 (平面)



RD10・27 (断面)



RD11 (平面)



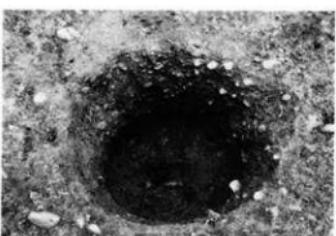
RD11 (断面)



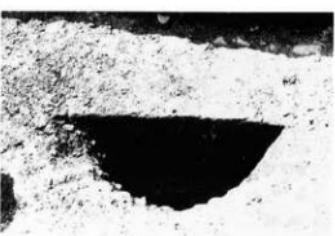
RD12 (平面)



RD12 (断面)

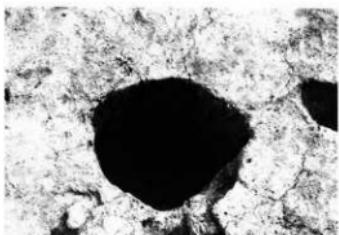


RD13 (平面)

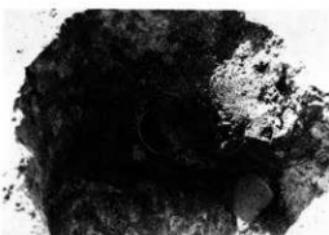


RD13 (断面)

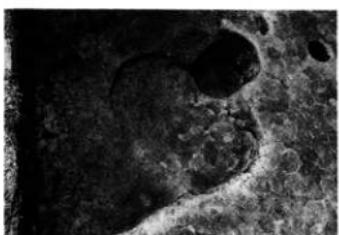
写真図版10 RD10・27～13 (平面及び断面)



RD14 (平面)



RD14 (断面)



RD15・16 (断面)



RD15・16 (平面)



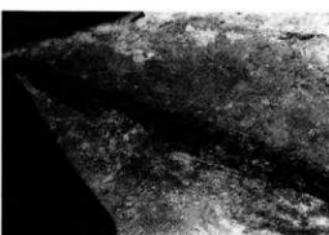
RD17 (平面)



RD17 (断面)

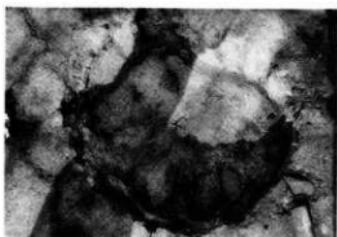


RD18 (平面)



RD18 (断面)

写真図版11 RD14～18 (平面及び断面)



RD19 (平面)



RD19 (断面)



RD20 (断面)



RD21 (断面)



RD20・21 (平面)



RD22 (断面)

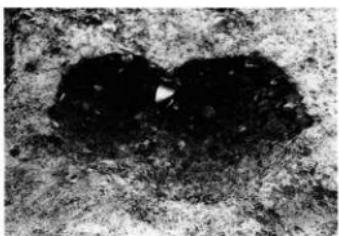
写真図版12 RD19~22 (平面及び断面)



RD23 (平面)



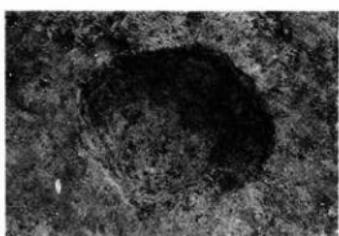
RD23 (断面)



RD24 (平面)



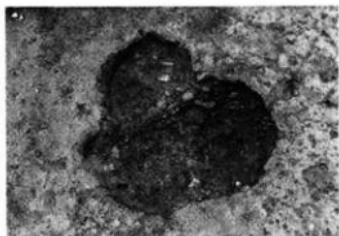
RD24 (断面)



RD25 (平面)



RD25 (断面)



RD26 (平面)

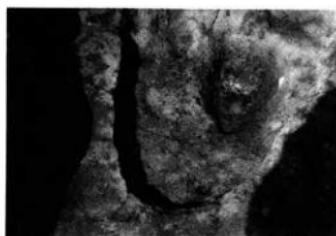


RD26 (断面)

写真図版13 RD23~26 (平面及び断面)



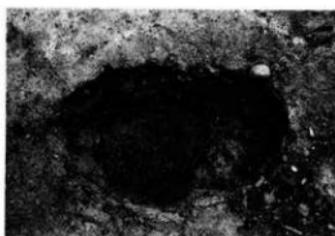
RD27 (平面及び断面)



RD28 (平面)



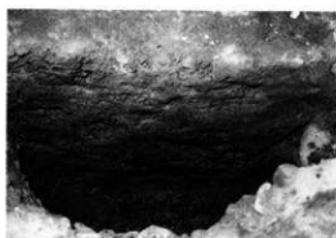
RD30 (断面)



RD31 (平面)

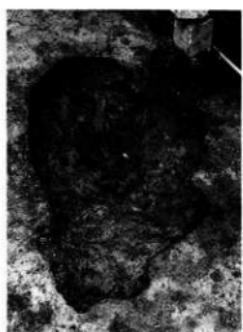


RD31 (断面)



RD32 (断面)

写真図版14 RD27~32 (平面及び断面)



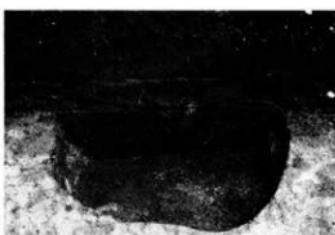
RD33 (平面)



RD33 (断面)



RD34 (平面及び断面)

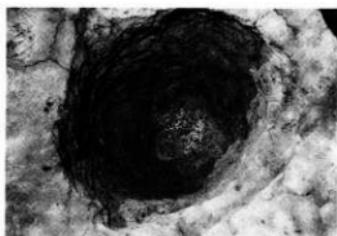


RD35 (平面及び断面)

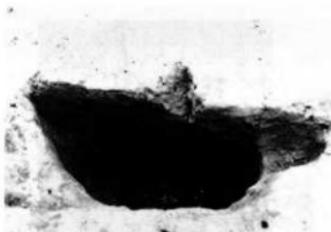


RD40 (断面)

写真図版15 RD33~40 (平面及び断面)



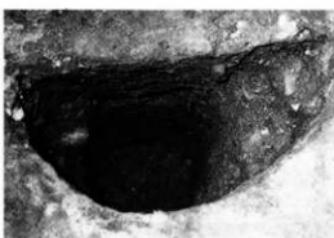
柱穴 1号 (平面)



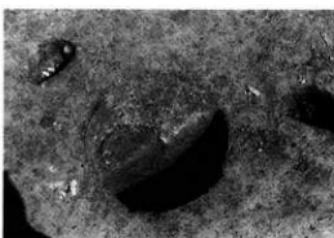
柱穴 1号 (断面)



柱穴 2号 (断面)



柱穴 3号 (断面)



柱穴 4号 (断面)

写真図版16 柱穴 1号～4号 (平面及び断面)



北端部①(北方向から)



北端部②(南西方向から)



北端部③(北方向から)



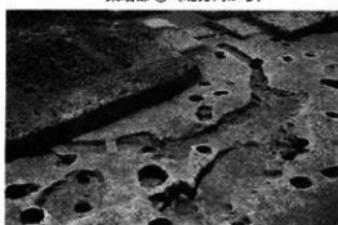
北 部(東方向から)



東端部①(北方向から)



東端部②(南方向から)

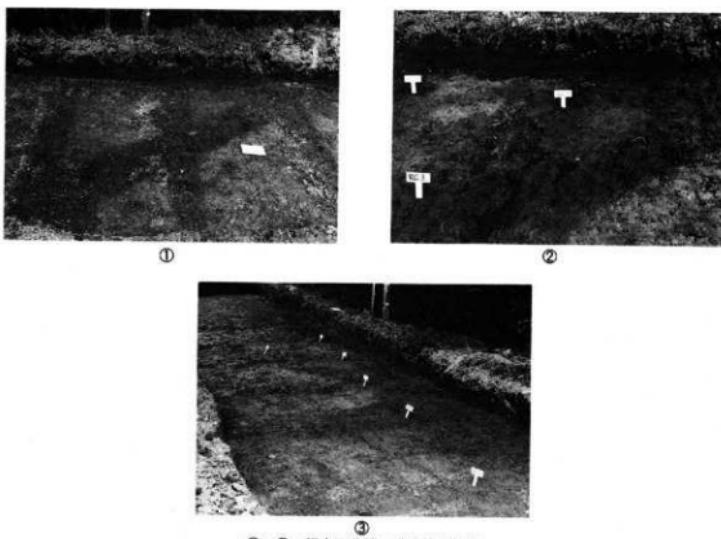


中央部①(北東方向から)

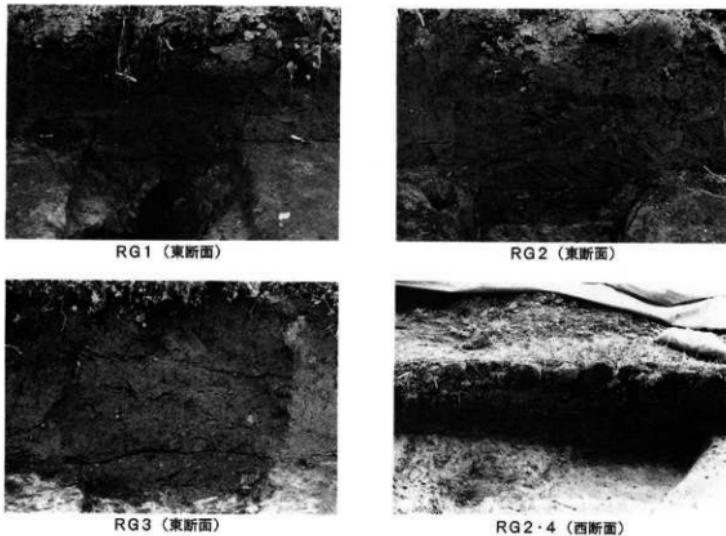


中央部②(北方向から)

#### 写真図版17 土坑・柱穴状土坑群全景



①～③ 調査区北端 溝跡検出状況



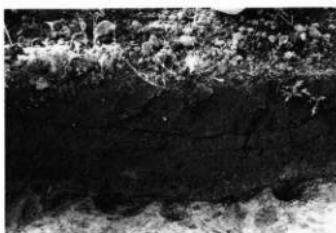
写真図版18 溝跡全景・RG 1～4 (断面)



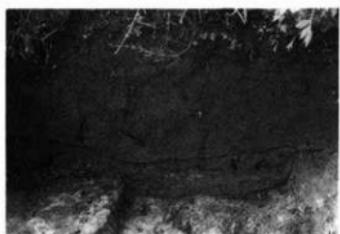
RG5 (西断面)



RG6 (西断面)



RG7 (西断面)



RG9 (西断面)



RG9 (東断面)



RG10 (東断面・北西方向から)



RG10 (東断面・南西方向から)

写真図版19 RG 5~10 (断面)



RG11（西断面）



RG11（東断面）



RG12（西断面）



RG12（東断面）



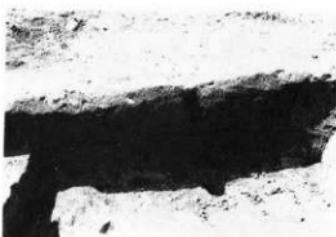
RG13（東断面・西北方向から）



RG13（東断面・南西方向から）



RG14（北断面）



RG14（南断面）

写真図版20 RG11～14（断面）



RG15 (北断面)



RG15 (南断面)



RG16 (平面)



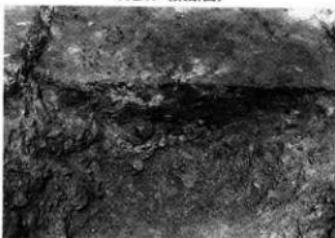
RG17 (西断面)



RG17 (東断面)

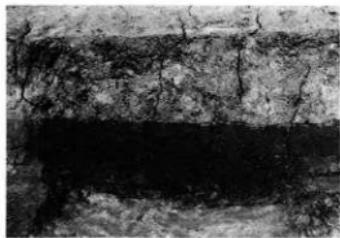


RG18 (平面)



RG18 (西断面)

写真図版21 RG15~18 (断面及び平面)



RG19（西断面）



RG19（東断面）



RG20（平面・北東方向から）



RG20（南西断面）



RG21（西断面）



RG21（東断面）



RG22（東断面・南西方向から）



RG22（北断面）

写真図版22 RG19~22（断面及び平面）



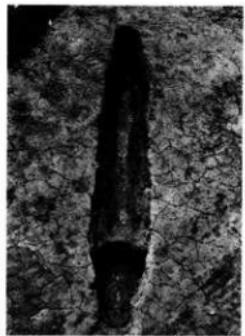
井戸跡（平面）



井戸跡（断面）



井戸跡の底部から曲物が出土



陥し穴1（平面）



陥し穴1（断面）

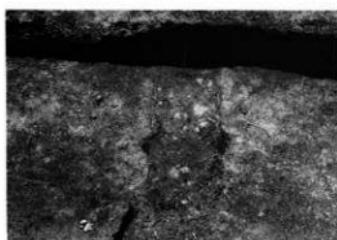


陥し穴2（平面）



陥し穴2（断面）

写真図版23 井戸跡・陥し穴(1)・(2)



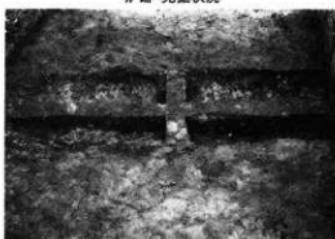
炉跡 検出時の状況



炉跡 完掘状況



炉跡 ベルト断面（南断面）



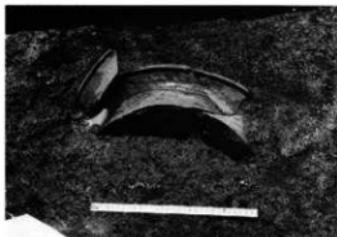
炉跡 ベルト断面（東断面）



炉跡 ベルト断面（北断面）



炉跡・RG21 完掘全景



遺構外出土遺物（須恵器：南端部より出土）

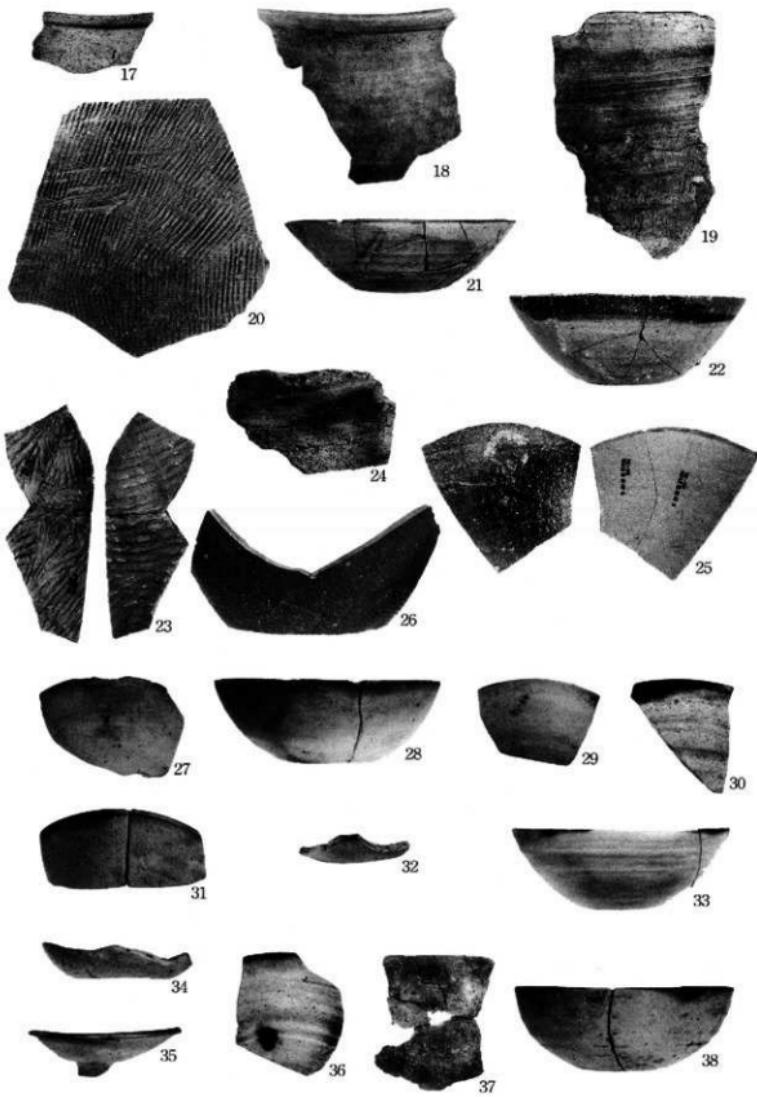


遺構外出土遺物（刺片：炉跡付近より出土）

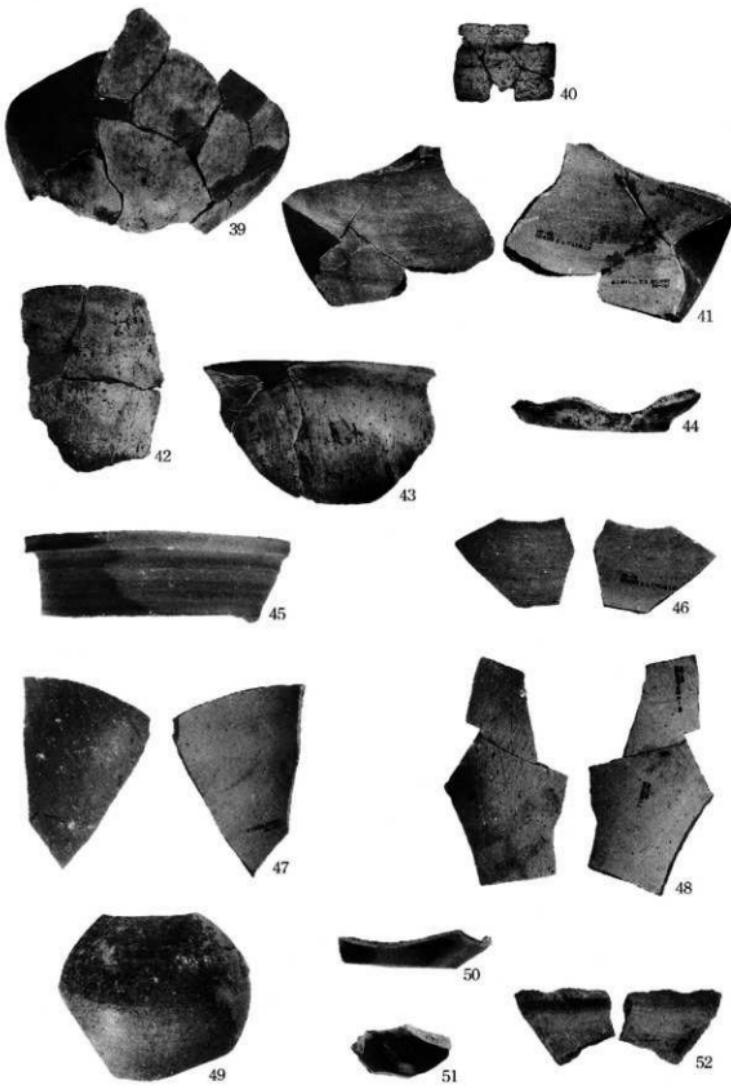
写真図版24 炉跡・遺構外出土遺物（2点）



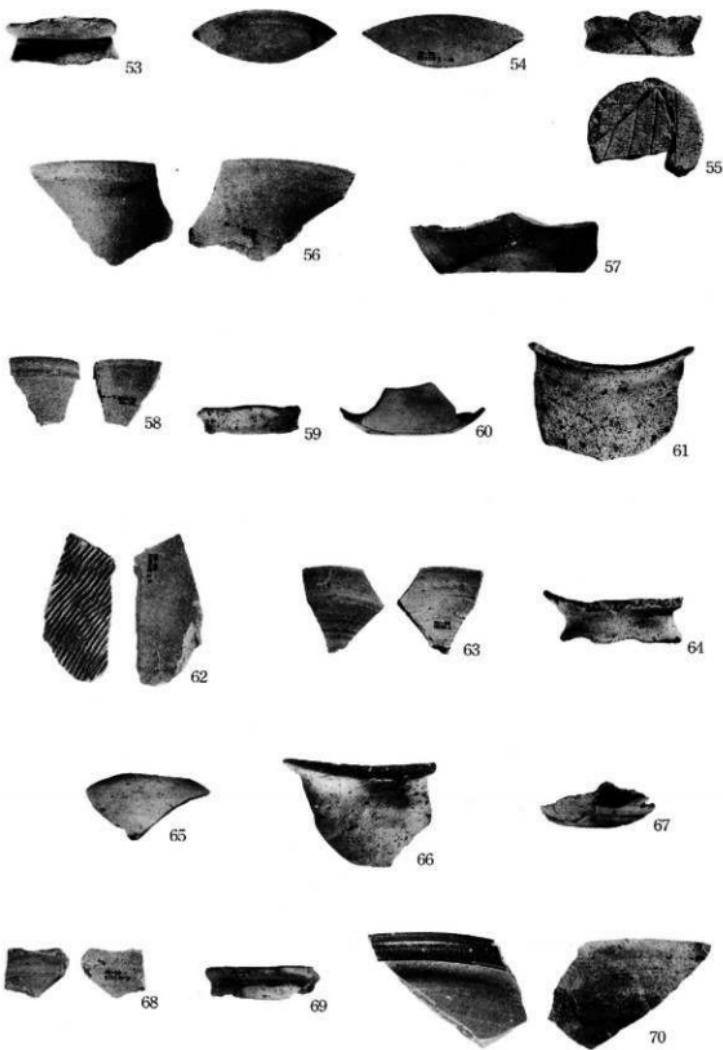
写真図版25 造構内出土遺物 1~16



写真図版26 遺構内出土遺物17~38



写真図版27 遺構内出土遺物39~52



写真図版28 遺構内出土遺物53~70



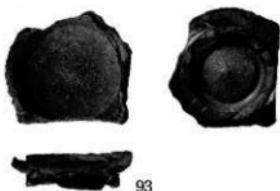
写真図版29 遺構内・出土遺物71~81



写真図版30 遺構内・外出土遺物82~91



92



93



94



95

写真図版31 造構内・外出土遺物92~95

## 報告書抄録

ふりがな	みのくちいせき はつくつちょうさ ほうこくしょ						
書名	水ノ口遺跡 発掘調査報告書						
副書名	担い手育成基盤整備事業 真城地区開発遺跡発掘調査						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第330集						
編著者名	半澤彦・菊池貴広						
編集機関	財団法人 岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001・9002						
発行年月日	西暦2000年3月10日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査面積	調査原因
水ノ口遺跡	岩手県胆沢郡 前沢町白山字 水ノ口57ほか	03382	NE37- 2033	39度 5分 10秒	141度 9分 30秒	1998. 4.16~ 6.19	2,700m <sup>2</sup> 担い手育成基盤整備事業真城地区開発に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
水ノ口遺跡	集落跡等	平安時代	堅穴住居跡 6棟 住居状造構 1棟 溝跡 22条 土坑 36基 井戸跡 1基 陥し穴 2基 炉跡 1箇所 柱穴状土坑 86基	土師器(壺・甕) 須恵器(〃) 陶磁器片 曲物(下部) 羽口片	平安時代の集落跡を中心であるが、出土遺物はないものの、縄文時代の陥し穴が併せて検出されている。		

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長 佐藤 基  
副所長 伊藤 直司

〔管理課〕

課主  
長查事  
川立日  
浪花影  
清多加志  
德睦夫

〔調查第一報〕

課長 小田野哲  
課長補佐木清宗  
主任文化酒井孝  
専門調査員 小山透  
文化財員 中田迪

嘱託 藤島恵子ヨ重  
〃 新田ト  
〃 佐々木光

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第330集

## 水ノ口遺跡発掘調査報告書

印刷 平成12年3月3日

発行 平成12年3月10日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185  
TEL (019) 638-9001・9002  
FAX (019) 638-8563

印 刷 有限会社 内 海 印 刷

盛岡営業所 〒020-0875 岩手県盛岡市清水町8-8-108  
TEL (019) 622-0288

本 社 〒026-0041 岩手県釜石市上中島町4-2-4  
TEL (0193) 23-5511

---

